エスペラント

LA REVUO ORIENTA

3月號

2600
1940
Marto



Jaro XXI
Nro 3

新撰エス和辭典

岡本好次編

ポケット型約 300 ペイジ

並（クロース裝）60 錢・送料 6 錢

上（革裝）80 錢・送料 6 錢

エス和辭典のうち，最もすぐれたものとして絶對的な信頼を受け，エスペラントの字引といへば，すぐ「新撰」といふくらゐである。型はポケットにしのばすに適する小さいものであるが，單語の數は最も多く，すでに 50 版を重ねてはゐるが，新しい語彙は，つねに追加して，最も新しいものにいたるまで收めてあり，譯語は最も正確，學習者が片時も傍を離してならないものである。

新撰和エス辭典

岡本好次編

コンサイス型 67 行 2 段組 824 ペイジ

革表紙

2 圓 50 錢・送料 6 錢

見出語約 7 萬，各種專門語，最新語にいたるまで收めてある。譯語はきはめて正確妥當，世界中のおもなエスペラント辭典を全部參照してあるから，これ 1 册で，それら全部に匹敵する。堂々 120 ペイジの附錄には，人名，地名，滿支人姓の讀み方，星座名などの譯，和文エス譯法，そのほか，エスペランチストに日常必要な事項を滿載。印刷は鮮明無比，裝釘は瀟洒，製本はきはめて丈夫である。

エスペラント單語カード

城戸崎益敏著

1 圓 50 錢・送料 14 錢

エスペラント文例集

四六倍判 150 ペイジ・80 錢・送料 6 錢

動詞，形容詞，助辭のうち日常最も多く用ゐられる重要な單語 720 語を選び，それぞれに多くの造語例，使用文例を添へてあるから，單に單語諳記用としてのみでなく，和文エス譯，自由作文などの參考用としても最も有益なものである。別に，同一內容の書架用の大形本「エスペラント文例集」がある。

綠星章

甲（和服用），乙（背廣用）
40 錢・送料 4 錢

丙（和服用），丁（背廣用）
80 錢・送料 4 錢

小型（和服用と背廣用あり）
40 錢・送料 4 錢

會員章（學會會員に限る）
70 錢・送料 4 錢

エスペランチストの紋章は平和と希望との象徴「綠の星」である。エスペラントを學ぶ者は，すべてこれを胸に輝かして，お互の合印としてゐる。本會制定の綠星章は，いづれも美しい七寶製である。

甲，乙，小型は合金臺，丙，丁，會員章は純銀臺で，甲，乙，丙，丁は白地綠星を圍むコバルト色の環に Internacia lingvo. Esperanto の文字入，小型は白地に綠星，會員章は，綠星に Esperanto-JEI の文字入。

圖書目錄は 3 錢切手封入お申込みください

東京本郷元町　財團法人日本エスペラント學會　振替東京 11325 番

エスペラント

LA REVUO ORIENTA

• Marto 1940 •

LA ENHAVO

Kovrilo: El la japana teatroarto • 1—Sceno de No-dramo (Klasika maskoteatro) 梅 (Foto de S. Kunii)

LA REVUO ORIENTA

Marto, 2600 (1940) Jaro XXI N-ro 3

二つの念願

——皇紀2600年に望む——

井上萬壽藏

☆輝かしい2600年にふさわしい仕事としてわたくしは二つの希望をわが Esp-ujo にむかつて申しでたいと思う。もとより慾をいえば限りがないし，人それぞれの立場からいろいろの希望もありうるであろうが，わたくしはわたくしの過去5年間たずさわつていた Turismo（觀光事業）の立場から二つだけこの聖なる年の記念として採りあげられることを望むものである。

☆その第一は日本文化史を編むとゆう仕事である。御承知のように日本文化とゆうものは unika なものである。それがまた日本への turistoj ことに歐米からのそれにたいして大きな魅力となつていることはたしかである。日本へ來た turistoj はたしかに日本文化，ことにその固有文化(外來文化でないもの)にたいして驚きの眼をみはり，大きな感銘をえて立ちさるのが普通である。しかしかれらがはたして日本文化を眞底から理解しえたかどうか。多くの人々はたゞ表面だけの上辷りの觀察に終つているのではなかろうか。

そこでわたくしは JAPANA KULTURO — Ties esenco k. historio とゆうような verko の現われることを日本文化のために待望せざるをえない。もとよりこうした本だけではたして十二分の理解を期待できるかどうか疑わしいかもしれない。なぜなら日本文化は多分に直感の對象だからである。しかしその verko が turistoj のより深い理解を助け，また日本に興味を待つ人々に實際に日本へ來ようとゆう旅ごころを起させるよすがともなるであろうと信ずる。ことにそれがよき stilo の Esp. 文で書かれる場合には Esp. の movado の將來のためにも役立つかもしれない。

☆この本を編むことがいかに必要であり，またいかに有益であるかはこれ以上述べるには及ばないと思う。たゞそれがいかにむずかしいものであるかは十分に考えてみる必要があるであろう。これまでの日本の歴史は純然たる政治史か少くともそれを中心とするものであつた。文化に關する記述はむしろ申譯的のものであつた。

學校の國史教科書までもがそうである。これは考えさせられる問題である。

しかも一番いけないことはこれまでの國史が日本の文化とゆうものはおうむね大陸から攝取し同化したものであるとしている點である。かな文字は漢字の變形でありとし，能樂は支那の散樂から來ているとし，日本畫は支那畫の祖述であるとする。それらの見方は形式的には正しい。しかし攝取するだけの素地があり，同化するだけの消化力のあつたところに日本本來の文化の存在を認めぬとゆうことは間違である。日支を同種同文とゆうが，それは皮相の見であつて，日支は同種でもなく同文でもない。生活文化の相違も日支の差は日本と西洋の差に近い。白木の家に住み，疊の上にあぐらをかき，淡泊なさしみを食べ，浴を好み，自然を愛するこの獨特の民族の本來の文化が何であり，それはどこから來て，どう變遷したか。JAPANA KULTURO の研究のめざすところはそれである。それがまた日本文化宣傳の目的にもかなうのである。

單に從來の歴史から政治史を引き去つたとゆうような消極的な態度でなく，積極的に日本民族の衣食住の生活文化，言語，信仰，文藝，美術，經濟，家庭，行事，思想などあらゆる文化過程および文化財の本質と變遷とをきわめることが必要である。

☆野原氏の日本書紀の譯が同氏のたくましい努力によつて續刊されたことは喜ばしい。同時により一層文學性を帶びた古事記の譯も現われてほしい。だがその上の慾をいえば「日本文化史出でよ」と叫びたい。そしてそれはこの意義ある 2600 年において少くとも緒口を見つけてほしいものである。もし精進の人あつてこの laboro に當られるならばわたくし自身もこれに協力するを惜しむものではない。

☆第二の願ひは日本語に關するものである。日本にくる turistoj で日本語をはなすものは少い。それは一つは日本語があまりにむつかしいからであつて，たまに話す人があつても片ことである。

上に述べた JAPANA KULTURO ができて，それを Esp. でよみこなせば，その上日本語までおぼえてもらう必要はないとも一應はいえよう。しかし日本を一わたりでなく深くはつきりと知ろうと思う人々には日本語をも學んでもらうに越したことはない。そのことはけつして Esp-ismo に反することではない。

わたくしは日本語を覺えるよき手引も Esp. で現われてほしいと願う 1 人である。そしてこのことも 2600 年の日本 Esp-ujo に課せられた laboro の一つであるべきではなかろうか。

(1 月 30 日)

筆者は學會常務理事；鐵道省養成課長，昨年末まで國際觀光局庶務課長

進藤靜太郎

幸運兒ホドラー

その20年忌に

Hodler と UEA, 特に Delegito 組織の具體化とは Esp. 運動史上離すことの出來ぬ關係があることは既に餘りにも著名であるが, 彼の死後 20 年の今日稿を新にして Esp. の爲め一命を捧げた彼を追憶したい。

Esp. 語の實用の爲, 各地に代表者を置くとゆう考は UEA の Delegito 組織よりも更に古く, 既に 1904 年佛國 Béziers 市の同志 A. Carles (カール) が Zamenhof に „konsuloj“ とゆう名稱の下に提案して居り, Z 博士も其の主旨に贊成している。翌 1905 年ブローニュに於ける第 1 回萬國大會に提出せられて審議未了, 更にジュネーヴの第 2 回大會に提議され, 其の趣意は採擇され, 實現を待つばかりになつていた。

他方佛國 Beaune 市の同志 Th. Rousseau (ルーソー) も亦 „Esperanto-Oficejo“ の各地開設を提唱し (1906 年), カール案の Konsulo よりも廣く, 書籍その他の Esp-aĵoj の販賣, 飜譯の機關となるもので, 雜誌 „Tra la Mondo“ を通じてその實現促進に努力し, 漸次各地にその設置を見つゝあつた。

尤もこの二つの案も單なる天外の奇想でなく, Esp. 發表以來 20 年の歲月の間に培れた Esp. 運動の實力の上に基礎を置くもので, ホドラーも指摘する通り, パリーの Centra Oficejo の統計に依つても當時既に四五百の確實な地方會が存在し, 次の時代を約束するに足るものがあつたのである。

然るに此の組織達成が是等の iniciativoj に依つて直に實現しなかつたのは一部の論者 (UEA 一派及び左翼一派) の說くが如く, 當時の運動主腦部の怠慢不明の爲めでも何でもない。Z 博士自身に眼科醫の開業漸くその緒につき生計に補助を仰ぐ必要も無くなり, 幾分でもの餘暇を Esp. にさき得るようになられた矢先, パリーの同志の熱に惹かれ大書店 Hachette 社との出版契約の矢面に立つ事となられ, Cart 教授は狹い Esp. 出版界に現れた此の强敵に對して Lingvo Internacia 誌並びに Presa Societo の經營, さては教授獨特の論陣維持に大童であり, Sebert 將軍は生れて間もない Centra Oficejo の企劃に寧日なく, Bourlet は Hachette と Z 博士との爲に立つて La Revuo 誌並びに其文庫の實現に沒頭しつつあるとゆう有樣, フランス以外では Nacia Asocio の組織次第に成るとゆう時期であるから, 現狀の維持發展だけでも皆並大抵でなかつた。新しい仕事には新人を, そして新進氣銳の蛟龍には雲を——要するに人と時とを待つていたのである。

時とは卽ち Delegacio-Ido の變であつた。卽ち 1900 年パリーの萬國博覽會に際してクーチュラー及びローに依つて提唱設立された斯の國際語採用委員會は多數の Esp-istoj の支持と物的補助の下に

其の計畫に基き採斷を國際學士院聯盟に乞うて拒絶され，それ自らの實行委員會運用の止むなきに到つたが，この最良第1案の實現不可能に陷つて氣勢衰え，その實行委員の活動もとより思わしからず遂に殆どクーチュラー，ロー兩人の獨裁專行下に最後の案を作り上げ，1907年11月2日「イード案に依るEsp.改良案」を最後の通牒的にZ博士並に言語委員會に對して通告しその回答を12月6日までの期限を以て要求したのであつた。この樣な改革强要に對してZ博士は勿論，時の言語委員會頭 Boirac も同意することを肯じなかつたのは當然であるが，此處に Esp. 使用大衆の總意を纒めて之に對して立ち上つたのが青年ホドラーであつた。

ホドラーは既に1903年級友プリウァがEsp. 文法を示した時 „Ankaŭ mi jam eklernis la lingvon.“ と答え，3週間後には此の若冠2人で „Juna Esperantisto“ なる小雜誌刊行に乘り出し，或は既刊の有名誌に稿を寄せ，或は1905年 Bernardin de Saint Pierre の „Paŭlo kaj Virginio“ の譯を時の Presa Societo より出し，1906年ジュネーヴに於ける第2回萬國大會に參劃して大いに活躍し，これを契機に終に同年學業を中途に棄てて一身を Esp. に捧げんと決心し，1907年 Paul Berthelot より „Esperanto“ 誌を讓受け，Esp. 實用化の旗じるしの下にカール及びルーソーの案にも響鳴して時の Esp. 論陣に既に一家をなしていた。即ちようやく滿二十歳に達した若冠ではあるが彼には立派な地盤とそれに加うるに献身の誠が比べものもない大きな力となつて新進氣鋭の頭に光つていた。



Kliŝo el Enciklopedio de E.

Hector Hodler
sviso, kunfondinto kaj direktoro de UEA. Naskiĝis 1 okt. 1887. Mortis 31 marto 1920
(*Enciklopedio de Esperanto*)

Delegacio-Ido の變に際して，此のホドラーの頭腦にひらめいた理論は次の如くである。「此の問題は Esp-istoj 全體の問題である。Z博士と雖も既に Esp. 語に關する權利は單に自分一個人のものでないと宣言した以上，博士の Esp. に對する權威は純粹に morala なものでしかない。且つ言語委員會も此の樣な重大な問題に就いて單獨に決定する事は出來ず，又萬國大會も只參加者の任意的希望を表明するに留り何ら全 Esp-istaro の總意を有效に表示するものでない。全 Esp-istaro の總意は現存地域的會團と分科專門團體の代表の合法的總意でなければならない。」此處にホドラーの Delegitaro

Esperantista の根據が出來上つた。カールの Konsuloj, ルーソーの Oficejo の名前に對して Delegitoj なる名稱が與えられたのもこうゆう立場からであつて，これが現在まで殘るに到つたのである。

1907年12月ホドラーは Unua Cirkulero を發送し「何人と雖も天降り命令を以て改革を行う事を得ず，若し眞に Espistaro の一般的意見が改革に傾く場合有りとするも，正式に選出せられたる Delegitoj に依つて一般利害が妥當に考量せられる事は運動全般の統一上必要缺くべからざる要件である」事を宣明し，「更にかかる Delegitoj の國際的基礎の上に Esp. の實用上の效果增進が最も的確に行い得，將來あらゆる機會に Esp. の利益を最も有效に擁護し得る」事を發表した

この機宜に適した廻狀に對して108團體828人以上の贊成回答が集つた。

その內に他方 Ido の陰謀は漸くその眞相を暴露し，自らその魔力を失い，Z 博士の情理を盡した Cirkulero，言語委員會頭 Boirac の理路整然たる眞相報告，更に最も直截にして力强い Cart 教授の „Ni fosu nian sulkon!“ の宣言に Esp 陣の動搖もさしたる危險を伴わずにして治つた。

この間，ホドラーの若く賴もしい姿は Esp. 大衆に强く印象づけられた事は當然である。殊に彼が漸く軌道に乘らんとしていた Esp. 實用の問題と代表組織とに上述の如き紐帶を豫見し一般大衆自ら持つ偉大なる使命を强調した事は最も大きな功績と云わねばならない。しかもホドラー自ら何ら個人的野心を藏せず，全身これ Esp. の爲とゆう若人の熱血をみなぎらした純眞の論調には何人と雖も感動したに相違なく，他方熱誠の餘り往々四圍の事情や推移を無視した獨斷的なところも無いではなかつたが，此の些細な過失を殊更にとがめず却つて溫い激勵の辭を送られた Z 博士，Cart 教授等の親心は現在我々にも切々と胸に迫るものがある。

實に此の一事實を以てしても，如何にホドラーが巧まざる自然の takto を多分に持つた幸運兒であるかを伺い知る事が出來る。（この takto は遺憾乍ら彼の死亡と共に UEA から失われた。それは Privat にも將又 Stettler にも，いわんや Jacob にも見出し得ない。彼なき後は Privat の行きすぎを制御するもの無く，juristo Stettler に時機を過らぬ方針を示すもの無く，光榮ある UEA を今日の如き體たらくに陷れたのである。）

しかもこの天賦の takto は彼の弛まざる努力によつて益々研をかけられた。そして，よくカール及びルーソーの原案を消化して1908年現在の Delegito 制度の骨子を作り上げ，會員組織による UEA によつてその肉をもり上げる事に成功した。

然し乍ら此の樣な世界的企劃は單に Esp. 界のみでなく實に世界的破天荒な大事業である。從つてその經營の前途には先人未踏の難關が多々あつた事は想像するに餘りある事である。ホドラーとて是等を免れ得る筈なく，第一次世界大戰前までは實に難關の連續であつた。初期に於ける餘りにも低廉な會費の如き若氣の樂觀に基く失敗も少くなかつた。然も若年とは思われぬ takto に惹付けられる樣にして集つて來た人材，內には Privat,

Stettler, Jacob, 外にはイギリスの Bolingbroke-Mudie, ベルギーの P. Blaise, スイスの J. Schmid の活躍によつて組織としての UEA は立憲的成長を續け, 漸くその經營順調に向わんとした時, 突如として勃發したのが第一次世界大戰であつた。一號の缺號すらなかつたホドラーの Esperanto 誌も終に 6 ケ月休刊の止むなきに立到つた。これに屈せずホドラーが發案したのが Esp. による交戰國間の無辜の人々の文通の仲介である。この servo に對しては戰後共和國ドイツより感謝の頌表を贈られた程であつた。しかも此間殆ど病床にありながら大戰禍の原因に就いて思索をめぐらし, 中途にして Esp. の爲棄て顧みなかつた學問を再び取上げて倦む事を知らず, 更に自己の手に移つて以來寸時もゆるがせにしなかつた Esperanto 誌の編輯の爲最後まで筆を捨てず, 終に身を以て文字通り Esp. に殉じたのみならず, 父より繼いだ遺產を擧げて UEA の基金に投じたのであつた。

彼の父 Ferdinand Hodler は若年の頃其の進步的畫風の爲, 世に入れられなかつたが, チューリヒの國立畫廊に劃紀的歷史畫を完成するに及んで初めて其の眞價を認められ, 在來の煩瑣な細部描寫以外に肖像に內的描寫を盛つた不出世のスイス國寶的畫家であつたが, 彼 Hector もこの父からその天賦の先見をついだのであろう。

しかし彼ホドラーは決して研鑽を怠らなかつた。Esp. 改良問題に就いては既に Idiom Neutral や Bolak を究め Ido の時にも充分の見通を持つて居たのであり更に Esperanto 誌刊行, UEA 創立の當時理論家 René de Saussure の薰陶を受けて組織的經營の實地を授けられたとは何んたる幸運であろう。

誠にホドラーこそは, たとえ中道にして倒れたとは云え, 天賦と努力, takto と環境に惠まれた Esp. 界の幸運兒とも云うべきであろう。我々は此處に人と組織との微妙なる結合を如實に見る事が出來時節柄大いに敎えられるところがある。

川崎直一君の適切なる指導の下に桑原利秀君所有の 1928 年 UEA 版 ,,Hector Hodler-Lia vivo kaj lia verko" に依つて責を塞ぎ得たるを感謝す。)

リングヴイ　レスポンドイ

■質問は要點を簡單明瞭に！
■書名，版數，ペイジ，行數などをはつきり書くこと。
■回答者を指定してよい。ただし，必ずしも，編輯部がその要求に従うとは限らない。

1　前置詞省略の目的格

問

長野縣
小笠原敏雄

Kion mi estas *kulpa, ke* mi estas juna? (*Marta, p 53*) は **Pri kio** mi estas kulpa, . . . の前置詞省略目的格と見なしてよろしいでしようか。もしそうなら省略の目的格變化としての原則に當てはまらぬように思えますが。

答

小坂狷二

前置詞省略の目的格と見るがよろしい。(1) 名詞又は形容詞には直接目的語をつけると若し文の説明語動詞が他動詞であつた場合などにはそれの目的語と解せられたりして文解釋に混雜を起すおそれがあるので前置詞を介せしめるのが定法である。然し誤解が起るおそれのない場合には前置詞省略の目的格を附して勿論差支ない。先ず名詞に對しては移動方向を示す前置詞省略目的格は誤解を起すおそれが少いから，時に用いられることがある。例えば disvendi librojn『本を販賣する』なる句をそのまゝ名詞化して Mi legis pri la *disvendo librojn* としては『販賣に就て本を讀んだ』と誤解されるかも知れぬ故前置詞 de を介して Mi legis pri la disvendo *de* libroj. 『本の販賣に就て』とする。然し『コルムブスは印度へ到る西方の道があると云う考えを抱いていた』は前置詞省略の目的格をつけ

Kolumbo havis la ideon, ke ekzistas okcidenta *vojo Hindujon* (=vojo *al* Hindujo). としても誤解のおそれはないから使つても差支ない。次に形容詞には數量の前置詞省略目的格が用いられる(此の方はむしろ普通に用いられる用法)。

Tiu ĉi rivero estas ducent kilometroj*n* *longa* (=longa *je* 200 kilometroj)=Tiu ĉi rivero havas 200 kilometrojn da longo.) 此の川の長さは二百粁ある。

前置詞には數量の目的格以外にも前置詞省略の目的格が用いられる例が少數ある。

Sed la ŝipanaro montriĝis ne *inda* sia*n* mastro*n* (=ne inda *je* sia mastro). 然し乘組員はこの(えらい)長官をいたゞくだけの値打のない者共であると云うことがわかつた。

なお本問の如く kulpa にも用いられる。

Li neniel estas *kapabla* mortigo*n* (=kapabla *je* mortigo). 人殺しなどやれる度胸はない。

此等は自動詞に前置詞省略目的格が用いられる(例えば Ili iris *la vojon*=Ili iris *sur* la vojo『その道をたどつた』)と同様『誤解のおそれがない場合には前置詞の代りに pli malpeza な形式たる目的格を用いてよい』と云う前置詞省略目的格の根本原則にもとる所はない。

(2) Kulpa には質疑者の解釋の如く pri を用いても勿論よいが多く en (又時に je) が用いられる。Zamenhof の例:

Ŝia fratino *en* ĉio estas *kulpa*. (F 55/7) 何もかも姉のせいだ。

Ne la rusa gento estas *kulpa en* la besta buĉado en Bjelostok. (OV 370/14) ビヤウストクの虐殺はロシヤ人のせいではない

(3) 本問の **Kion . . .**, **ke** の用法は特殊な面白い語法なのである。(ke 以下の文は Kion の apozicio)

Mi devas malĝoji *pri tio, ke* mi naskiĝis malriĉa. 貧乏に生れたのは悲しむべし。

Ĉu mi devas malĝoji *pri tio, ke* mi naskiĝis malriĉa? 貧乏に生れたのは悲しまねばならぬだろうか。

Kion (aŭ **Pri kio**) mi devas malĝoji, *ke* mi naskiĝis malriĉa? 貧乏に生まれたつてことが何が悲しむべきことだ

Mi estas kulpa *en tio, ke* mi estas juna.
私がわるい點と云うのは私が若いと云う點（若いせいです）。

Ĉu mi estas kulpa *en tio, ke* mi estas juna？ 私が若いと云うのが私のせいでしようか。

Kion (aŭ **En kio**) mi estas kulpa, *ke* mi estas juna？ 私が若いつてことが何で私のせいだろう（私の知つたことではない，仕方がない）。

2 何故冠詞がないか

問 長野縣 **小笠原敏雄**

Permesu, ke *virino*, kiun vi bonvolis elekti kiel objekton de via amuziĝo, ripetu al vi... (*Marta, p 196, 4 l*) の virino はマルタを意味し，而も從屬文で特定されているのに，何故 la がつかぬのですか。

答 佐々城佑

此の問題の回答として，廻りくどいようではあるが，substantivo に冠詞のつかない場合を一わたり調べて見た方が實際の了解に役立つと思う。尤も固有名詞，又所謂 抽象名詞，物質名詞，呼格（vokativo）等の場合は省略する。例に引用したものは Ekzercaro からと，岩下順太郎氏の完全に蒐錄された Konkordanco de Dandin（未出版）からである。

(1) iu ajn のやうな意味をもつ場合。

Ekz. §5 *Leono* estas besto.

上文の leono は leono でありさえすればどれでもよく，一般性をもつたものです。

§25. Honesta *homo* agas honeste.

この homo は誰でもよいが，一の制約は honesta である事である。云い換えると Homo, kiu estas honesta, agas honeste となる譯で kiu estas honesta は一種の拘束力を有つて honesta ならざる者を悉皆排除する。然し honesta でありさえすれば誰でもよいとゆう餘裕をもつている。

§22 *Homo*, kiun oni devas juĝi, estas juĝoto.

同種の例は §27 skribtablo... *tablo*, sur kiu...; §36 *Virino*, kiu kuracas, estas kuracistino. §40 *Magazeno*, en kiu... 等に見られる。

Dand. 11/31 Mi volas diri, ke via filino ne kondutas tiel, kiel *edzino* devas konduti (edzino であれば，どんな edzino でも正になすべき)

同種の文例 12/20; 25/13 faras *virino*, kiu volas plaĉi nur al sia edzo; 35/17.

(2) iu; unu; certa 等の意味をもつ場合。

(1) の場合とは異り，どれでもよいのではなく，定つてはいるが，はつきり指示しない。

§6 Jen estas *pomo*. （どの pomo でもよいのではなく，目前の一個を指している）。

§7 Mi vidas *leonon*.

§8 Antaŭ la domo staras *arbo*.

尙お Ekzercaro の La Feino に次の例がある。

§15 En unu tago, kiam ŝi estis apud tiu fonto, venis al ŝi malriĉa *virino*, kiu petis ŝin...

之に對し，次の例では unu が用いてある。

§19 Apenaŭ ŝi venis al la fonto, ŝi vidis *unu sinjorinon*, ... kiu eliris el la arbaro.

Dan. 19/27 Sciu, ke vi eniris en *familion*, kiu donos al vi apogon（よいか，お前は，お前を引立てやろうと云う一族に仲間入りしたのだぞ）

42/21 Jen estas *frapo*, sendube, kiun vi ne atendis. （お前が豫期していなかつた一撃）

12/5 oni... ne vidis *virinon*, kiu donus kaŭzon 等も此の部類に屬する例と見てよかろう。

(3) unu el のような意味をもつ場合。

Mi parolis kun knabo, kiu vizitas tiun lernejon. の如き文に於て，kiu 以下は明かに knabo を拘束はしているが，澤山いる中の1人である故冠詞はつけない。尤も「あの學校に行くあの兒」と限定した場合 la をつける事

は無論である。早急の際で，適當な文例は見當らないが，Ekzercaro に

§27 ...(sed nur post *prepozicio* kiu finiĝas per vokalo) 母音で終る前置詞は若干あるが，その中の1前置詞。

此の例は (2) に入らぬ事はないが，然し (2) の例は，必しも (3) のように unu el la —j と考えるとゆう譯には行かない。

unu el の場合は次項の esti の次の名詞に現はれる事もあるが，重復を避けて次項では之を略する。

(4) post la verbo "esti"

a)

Ekz. §5 Leono estas *besto*. Rozo estas *floro* kaj kolombo estas *birdo*.

besto は leono の屬する speco を指している。floro も birdo も同樣で，Ekzercaro 開巻第一頁に於て此の句に見馴れている諸君は何等不審を起さないだろうが，再考して見ると，これは餘程特殊な場合（例えば小供を敎えるような時）でなければ實際には使わないように見える。犬等を見て，あれは獸だと云つたら，その人の saneco が疑われよう。尤も「鯨は獸だ」とか不明な種屬を明にするような場合は問題外である。

b)

Ekz. §33 Mia fratino estas tre bela *knabino*.

Mia onklino estas bona *virino*.

上文の knabino, virino は，一見何でもないようで，一寸得體のつかめないものである。私は之に senkolara komplemento 又は helpilo de subjekto-modifaĵo とゆうような名をつけて見る。卽ち上文は姉妹が bela な事，叔母が bona な事を云いたいだけで，knabino, virino は形容詞の落着きの爲の substantivo に過ぎない。その逆證として，この形容詞を除去して，

Mia fratino estas knabino. (knabo に對し)

Mia onklino estas virino.

では全く sensenca なものになる。

若しこの knabino, virino が成立つものとしたら knabino, virino に特別な意味を附與し，（例えば knabino には若い，— Ŝi estas ankoraŭ knabino. の如き，又 virino には典型的な婦人とか何とか特殊の意味を含ませねばならない）。そしてその場合には，最初の bela knabino, bona virino の knabino, virino とは異つたものとなつて來る。

こうゆう意味から觀て，Ekzercaro の

§16 Li estas knabo, kaj ŝi estas knabino.

Ni estas homoj. Vi estas infanoj.

は全く ekzerco ものであつて，實生活には一寸出て來ないものである（尤も上文の homoj は grandaĝuloj の意とは解せられるが，それにしても ekzerco ものの外には出難いであろう）。

次の文は senkolola な helpilo の性質を表わしているように思う。

§32 Glaso de vino estas *glaso*, en kiu antaŭe sin trovis vino, aŭ kiun oni uzas por vino; glaso da vino estas *glaso* plena je vino.

Dandin の例からでは

10/20 ...mi ne estas *homo*, kiu lasus defali eĉ unu colon de miaj pretendoj

34/4 Ŝi estas *virino*, kiu meritas esti adorata.

36/3 ...ŝi estas *knabino*, kiu valoras monon.

此等の例では kiu 以下が homo, virino, knabino に對して，充分の重みをかけていて kiu 以下が云いたい許りに，そのひつかかりに homo, virino, knabino 等を使つただけでその語自身としては甚だ影の薄いものである

c)

Ekz. §16 Ili estas *rusoj*.

此の例は Ni estas homoj. Vi estas infanoj. の直ぐ次に出ているが，rusoj の文では前の senkoloraj のとは異つて，はつきりした informo を與えている。subjekto の informodonanto 又は karakterizigilo とでも云えよう。

§5 La patro estas tajloro.

も同種であり，第1項に揭げた例の中で §22 の juĝoto, §36 の kuracistino 等も此處に屬するものであろう。

なおこうゆう場合も考えられる。本來は karakterizigilo であり乍ら，その意味を喪失して senkolora になる事がある。例えば

Li estas studento.

なる文に於て studento は彼が何者であるかを示す重要な informilo であるが，學生許り居る中で，その中の1人を指し Li estas diligenta studento. といえば diligenta に重要性を奪われて studento は甚だ淡い存在となるであろう。

ĉ)

Dan. 30/21 mi tre dezirus liberigi min de *edzino*, kiu min malhonoras.（私は私の顔に泥を塗る妻とはお別れ申したいんですが）。

此の文の edzino は iu ajn でもなければ certa とも云い難い。又無論 unu el ではなく，明かに自分の edzino を指している。

私はこの文の一皮下には liberigi min de (*ŝi, kiu estas mia*) edzino のような感じが仄に流れているように思う。

5/14 anstataŭ preni *edzinon*, kiu tenas sin pli alte ol mi.（お高くとまつている奥さんなど頂かないで）

この edzino などは隨分一般的な云い方をしているが，明かに自分の妻を考えている事が察せられよう。

44/4 Tamen ĝi estas ja agoj, kiujn vi devas pardoni al mia aĝo, forlogiĝoj de *juna persono*, kiu ankoraŭ nenion vidis...（ですが，私の年に免じて赦して頂かねばならないような行い，未だ世間見ずの若い者が犯した迷とゆうものです）

この juna persono=junulino なる語によつて自分をたゞ mi と呼んでしまわずに特殊な氣持を出したものでしよう。强て parafrazi すれば de (mi kiu estas) juna persono となりましよう。

偖て，やつと質問の本問題にかゝりますが，

Permesu, ke *virino*, kiun vi bonvolis elekti kiel objekton de via amuziĝo, ripetu al vi...（あなた樣がお慰み物として，態々お選び頂きました女が……）

これまでの說明で，旣にはつきり御了解の事と思いますが，この virino は質問者の指摘された通り，マルタ自身を指しますが，マルタは自分を出さず，男に對する女としての virino なる語を使わせたのが，此處では大變重要な點でしよう。la virino（その女）と限定しては，此の文だけでなく Marta 全篇を通じて激しく訴えている virino の senco を寧ろ破るものでしよう。この virino は一ぱい意味の籠つた karakterizigilo のものと解すべきと思います。

大變よい問題を出して下さつて，勉强になつた事をお禮申上げます。同時に，非常に多忙な爲もつと立派なお答が出來なかつた事を殘念に思います。

3　文體の文法・表現の文法

問

長野縣
小笠原敏雄

Ŝian malgrandan kapon ŝi sentis kredeble tre peza.... (*Marta, p. 205, ↑10 l*) において，*Ŝian* は，knabino で，*ŝi* は Marta でしようか。

答

三宅史平

Ŝian も ŝi も，どちらも，knabineto (Janjo) をさしています。

なるほど，この文では，ŝi が主語でありますから，もし ŝi を Janjo とすれば，Janjo の頭をさすには，sian malgrandan kapon としなければならないとは，文法の教えるところであります。

ところが，malgranda kapo とゆうところから見て，これが knabineto のものであることは，たやすく考えられますから，一應，つぎのふたつのばあいが考えられるわけであります。

A. "ŝi" は，その malgranda kapo の持主（すなわち knabineto）でない，もひとりの人，つまり Marta をさす。

B. "Ŝian" は "Sian" の書きあやまり。あるいは，誤植であろう。

さて，どちらの意見がただしいか。それを判斷するには，まず，あとさきを讀んでみる必要があります。

En tiu tago ŝi plu ne iris en la urbon. Ŝi pretigis manĝon, konsistantan el lakto kaj faruno, verŝis ĝin sur argilan pladon kaj sidigis antaŭ ĝi Janjon.

Sed la knabineto manĝis ne multe. Ŝi estis silenta kaj neordinare serioza. *Ŝian malgrandan kapon ŝi sentis kredeble tre peza, ĉar ŝi konstante ĝin apogis per la maldika mano,* poste ŝi sidiĝis sur la planko apud la patrino, kuŝiĝis sur ŝiaj genuoj kaj ekdormis per dormo malfacila kaj longa.

斜體の部分を飜譯しますと，a. ŝi を Marta ととつたばあいは，

　　ヤーニョの小さい頭をマルタは，きつと非常に重くおもつたにちがいない。なにぶん，マルタはたえず，それを痩せた手でかかえていたから。

b.　ŝi を Janjo ととつたばあいは，

　　彼女の小さい頭は，ヤーニョには，きつと非常に重かつたのだろう。彼女がたえず，それを，かぼそい手で支えていたところを見れば。

とゆうように，この部分だけでは，どちらにとつても，意味がとうります。

ところが，そのあとさきを讀んでみますと a. のばあいでは，つじつまがあわなくなりますが，b. のばあいですと，すらすらつづきますから，b. ととるべきであると考えられます。

さて，うえにのべたところは，問題を小說の1部分としてとりあげ，これを常識的に解決したのであります。そして，文學作品を，趣味で讀むばあいには，この常識的な解決だけで，十分でありましよう。しかし，ここには，それが，語學の問題として，とりあげられたのでありますから，もう1歩すすんで，この見方がただしいか，どうかを，別の方面から調べてみましよう。

その手がかりとして，文體の問題をとりあげましよう。

文體の問題も，語學の問題とゆうよりも，よりおうくは文學の問題でありましようが，語學の問題としても重要なものであります——とかく，なおざりにされがちであるとはいえ。

さて，問題を，文體の立場から眺めますと "ŝi" が "knabineto" であることは，ひとめで明かであります。

とゆうのは，問題の文の出ている paragrafo にまず出て來る「人間」は knabineto であり，そして，問題の "ŝi" が出て來るまでのあいだには，Marta は出ておりません。しかも，その knabineto は，主語として出ているのでありますから，Marta が，この小說の主人公であり，かつ，まえの paragrafo で主語であるとはいえ，ここで，いきなり ŝi で代表されることは，まずないと考えてよいのであります。（もつとも knabineto が knabeto とか hundo とか，つまり "ŝi" 以外の人稱代名詞によつて代表されるものであるばあいは，別でありますが）。しかし，かりに，まえの paragrafo の影響が，ここにまでおよび得るとしても，そのすぐあとに，poste ŝi sidiĝis ... とあり，この ŝi が knabineto であることが，sidiĝis ... apud la patrino とあることによつてあきらかである以上，問題の ŝi は，文體のうえからいつて，どうしても M rta ではありえません。

よつて，問題が，うえにあげた A のばあいでありえないことは，あきらかであります。

では B のばあいでありましようか。

基本文法の立場から云えば，たしかに Ŝian は Sian でなければなりません。それゆえ，B のように解釋することは，問題を解決するに，もつともてつとりばやい道であります。しかし，いやしくも Zamenhof の著作を問題にするばあい，われわれは，もすこし深く考えてみる必要がありましよう。

もし，ここに Marta の原書があり，ポーラ

ンド語のわかる人があれば，問題の解決は，もすこし簡單になるかもわかりません。しかし，そうした便宜がありませんから，純粹にエスペラントだけの問題として考えましよう。

うえに，わたくしは「**基本文法の立場**」とゆう言葉を用いました。これは，つまり，「文學的表現」などを考えずに，事實を事實のままいいあらわすばあいの，機械的な文法の立場をいつたので，この立場（つまり，エスペラント學習のばあい）においては，文法がすべてで，それは最高命令者であり，それは，あまくだり的に絶對の權力を持つものであります。

しかし，われわれが文學的作品を書くばあいにおいては，そこで絶對であるのは表現であり，文法は，その表現においつかわれる奴隷にすぎません。もつともきびしい文法家の立場から見ても，せいぜい，御目付役とゆうところでありましよう。

さて，こう考えて，この問題を，「文學的表現」の立場から見ますと，まず第1に重要なことは，問題の文において，Ŝian malgrandan kaponが，文の頭に來ていることであります。

とはいえ，このことから，ただちに，Sianでなく，Ŝianがただしい，とはゆうわけにゆきません。もちろん，このばあいにも，Sianは誤りではありません。だが，それと同時に，Ŝianもただしいのであります。そして，そのいずれのばあいにしても，ヤーニョが自分の頭を重そうにしているとゆう事實を描寫している點においてはかわりないのであります。ただ，SianとŜianとは，そのおのおのが表現している意味がまつたく異つているのであります。すなわち，

Sian malgrandan kaponのばあいは，ヤーニョが，重いと感じているとゆう，ヤーニョの感覺の側から眺めております。そして，Sian malgrandan kaponを文の頭にもつて來たのは，「（他の部分ではない）頭を」とゆう意味で，これを强めるためであります。

ところが，Ŝian malgrandan kaponのばあいは，「ヤーニョの頭は，ヤーニョにとつて重そうであつた」とゆう，觀察者の側から眺めてをります。したがつて，このばあいにはŝiよりも，malgranda kapoのほうに重點がある――言葉を變えていえば，これを文の頭にもつて來たのは，文法のうえの形は目的語でも，意味のうえでは，主語であるからであります。つまり，觀察者の眼にまず映つたのは「ヤーニョの小さな頭」である。そして，この觀察者の眼には，その頭と，それを重いと感じる少女とのあいだには，所有するものと所有されるものと，とゆう關係は見えない，「頭」と「少女」とは，ばらばらになつているのであります。――觀察者の眼に映つた，「ヤーニョ（ŝi）の頭」と，それを重いと感じている「ヤーニョ」と，のように。

つまり，「基本文法」の立場から見れば，誤りのように見えますけれども，決して，文法のうえの誤りではありません。こうした用い方をただしいとする立場を「文學文法」あるいは「表現の文法」とでも名づけましようか。

これを，「基本文法」の立場から見ても，誤りでないように，ほぼおなじ意味を傳える文章に書きかえますと，

Ŝia malgranda kapo estas kredeble sentata de ŝi tre peza.

となります。（しかし，問題の文章と較べて，これが，いかにまずい文章であるかとゆうことは，たれにも，すぐわかることでありましよう。

要するに，與えられた問題の答は，最初に書いたとうりであり，また，Ŝianは書き誤りでも誤植でもないと考えてよいのであります。

ただ，最後に注意しておきたいのは，このばあい，“Ŝian”と書くことのできるのは，語學について十分立派な實力を備え，かつ，正確な藝術的感覺をもつた人に限るとゆうことであります。そうした人にして，はじめて文法をおいつかうことができるのであつて，「きわめて幼稚な文體でしか書けない」（これは，ヨーロッパ人から，とかく，日本のエスペランティストのこうむる批評でありますが）あいだから，基本文法をないがしろにした，付燒双の生兵法でやつては，おうけがのもととなります。

普通試驗問題と講評

• 昭和 15 年 1 月 17 日宮崎市で施行 •

問　題

エス文和譯

1) Mi foriras, sed atendu min, ĉar mi baldaŭ revenos.

2) Rekta vojo estas pli mallonga, ol kurba.

3) Mi aĉetis dekduon da ĉemizoj kaj du dekduojn da kolumoj.

4) Mi faris la kontrakton ne skribe, sed parole.

5) Estu trankvila, ĉar la knabo forpelis la hundojn.

和文エス譯

1) これは私が昨日買つた本です。中々面白い (interesa) 本です。

2) 夏になると山に登る人が多い。

3) 六千五百九十七萬。

4) 海の方が空よりも青い。

5) あの人は正直だからすきです。

口頭試驗

1) Legado
facila
hodiaŭ
paĝo
vere
ĵeti

2) Ĉu vi estas viro?

3) Ĉu tiu ĉi estas libro?

講　評

エス文和譯

成績は大體揃つて良かつたのは嬉しかつた。尤も一二の方は辛うじて安全圏に止まつたと云ふ向きもあつた。こうゆう方には今後一層頑張つて貰いたい。書き方に就て云うと大抵は綺麗に書けていたが，亂雜に書いた人も極めて僅ではあつたが見えた。字の下手なのは急に上手にはならないが，下手は下手なりに，キチンと書いて貰いたい。試驗に對する態度に眞劍味が足りなそうにさえ見えて，受驗者としては損であると思う。

1. 私は出かけますが，待つていて下さい。じき歸つて來ますから。

foriras は或所から離れ去るの意味で，「出かける」「出て來ます」「いつて來ます」等が適當でしよう。「あちらに行く」「去ります」等は生硬。sed, ĉar も，いつも「然しながら」「何故と云えば」等と譯さなくてもよい。baldaŭ「じきに」「程なく」位がよい。revenos は未來形ではあるが，邦語では「歸つて來ます」と現在に云つてよい。「でしよう」は不確定の場合。

2. 眞直な道は曲つた道より短い。

pli mallonga の pli を「一層」と態々譯さなくてもよい。mallonga を「近く」は稍不當。kurba は「曲つたの」と正確を期したらしい譯語もあつたが「道」を加えて差支ない。

3. 私はシヤツ一打とカラ二打とを買つた。

dekduon da ĉemizoj は形からゆうと「シヤツの一打」であるが，「一打のシヤツ」でもよい。邦語としては「シヤツ一打」がよいと思う。

4. 私達は契約を書面でなく口頭で致しました。

此の問題には躓かれた人が多かつた。ne skribe は「書面でなく」がよい。「筆記でなく」は生硬。

5. 御安心なさい。小供は犬を追拂いましたから。

Estu trankvila は「安心しろ」で，「靜にしろ」ではない。騒いでいるのに對して「靜にしろ」は Estu kvieta, Silentu 等である。

佐々城　佑

和文エス譯

初等向としては少しひねくれた問題を交えたのでどうかと思つたが揃いすぎている位同じ様な成績が得られた。

1. Tio ĉi estas la libro, kiun mi aĉetis hieraŭ. Ĝi estas tre interesa.

此の問題は一番尋常な問題であるのに不思議や Tio ĉi estas... と書き出した人は只の 1 人。Tiun ĉi libron mi aĉetis... が 1 人，tiu ĉi libro estas aĉetita de mi が 1 人。あと 10 人は 10 人共揃つて tiu ĉi estas... と云う書き出し。或は當地講習會で間き違えた癖ででもあろうか。『そちらは何々』に對して『こちら（の方の本）は』と云う特別の場合は tiu ĉi estas... であるが，單に『これは』と『指示』する普通の場合は tio ĉi 又は ĉi tio ... である。勿論輕く Jen estas... としてもよい。『外の本ではない昨日買つたその本』と云う特定の意であるから estas la libro, kiun... と定冠詞 la を附けねばならぬ。次の『中々……』の日本文には主語がないが，是は日本語の云い方で Esperanto としては上述の la libro を受けて Ĝi estas... と ĝi なる主語を立てる。然し Ĝi をぬかした人は 1 人しかなかつた。Ĝi を用いた人 8 人，tio を用いた人 2 人，la libro を繰り返へした人 2 人。La libro と同じ語をくりかえすとくどくなる，同様に estas tre interesa libro と libro を繰りかえすに及ばない。

2. En la somero multaj homoj iras sur (la) montojn.

『夏になると』を Kiam somero venas とした人が 2 人居たがそんな廻りくどく云わずとも en la somero と前置詞 en を用いれば事足りる。すべて言葉はくどくなく，簡潔に云い表わす様。同様に『何々する者多し，少し』などは單に multaj (malmultaj) homoj ... でよい（estas multaj homoj, kiuj... とした人が 1 人，他は殆んど皆 multaj でこれは好成績）。『山に登る』は恐くは grimpas, suprengrimpas, surgrimpas が多かろうと思つたが各 1 人宛だけ。これは斷崖などを攀じ上るで，普通の登山には大げさすぎる，iri sur montojn で充分（但し montojn は目的格付。... levas sin al monto と云うのがあつた，これは屋根へでも登る様。Supreniras al montoj と云うのがあつたがこの al の用法はいけない。

3. Sesdek kvin milionoj naŭcent sepdek mil.

Seskvinnaŭsep miriardoj と云うこわいみたいな答が一つあつただけで一般に良好。但し naŭ cent sep dek と一つ一つ切り放したり，naŭcentsepdek などとつゞけたりしては讀みにくい。又 milionoj の次に kaj を入れた人が 5 人あつたが，これはなくてよい。

4. (La) maro estas pli blua, ol (la) ĉielo.

是は estas blue と説明補語を副詞形にした人と，天を ĉelo と書き誤つた人があつただけであとは皆上成績。Maro, Ĉielo は冠詞なしでもよいが，Ĉielo は普通の觀念では『あの吾人の頭上にある天』と云う氣持ちで la ĉielo と云う。それにつれて la maro の方も la をつける方が對照的で普通の云い方。

5. Mi amas lin, ĉar li estas honesta.

『すきです』は amas が 1 人で，あとは皆

ŝatas. 英國 Esp. 運動の草分けの1人 Richard Sharp 氏がその自敍傳 „Travivaĵoj de Roŝo" 中に南米在住中 Esp. を學び始めるや否や講習會を開いた處講習生から『英語には to love と to like とあるが like の方は何と云つたらよいか』と質問され，『必要な單語は採用差支ないのだから liki とでもやつたらよかろう』と答えた。然し Esp. の ami なる語の用法に alkutimiĝi した今日では ami で英語の like と同じ感じが出るに至つたのでそんな語は mi jam ne likas. と云つている。英語をやつた日本人はどうも ami と云う語を英語の to love と同じと考えて『愛する』乃至『戀する』と和譯し單に『すき』の意に ami を使うのが恥しいらしい。Esp. としては『林檎がすき』は Mi amas pomon でよいのである。

小坂狷二

口頭試驗

口頭試驗は示された上記問題の外，試驗場内の用語をエス語にして之も併せて採點した。進行上のエス會語は大體良く了解された樣だが問題2の Viro の如く知悉されて居る單語が文字でなく耳で聽くと直ぐに浮ばないらしかつた。之は問題が意外にやさしかつた爲かも知れないが耳が慣らされて居ない故で遺憾であつた。

發音上の誤りとして氣付く事は相當古い人達が注意して讀まれたに係わらず，下記の樣に間えるものがあつたのは，學習の頭初に於てしつかり發音を極めて置く努力が缺如して居て，どうにもならなくなつた爲だろうと思われ殘念である。

facila (hacila—faĉila—facira)
Vere (bere)
ĵeti (ĝeti—zeti)

巣山　毅
杉田正臣

〔公告〕

學力檢定合格者

高等　下記の諸氏は，學力檢定規約附則により高等學力認定證の附與を申請されましたので，試驗委員會の詮衡の結果，これを適當と認め，附與することにしました。

昭和15年1月1日
財團法人日本エスペラント學會
理事長　大石和三郎

〔附則第1項によるもの〕 156. 渡邊哲（東京・會社員），157. 內藤爲一（名古屋・會社員），158. 山田武一（東京・藥劑師），159. 黑田利弘（大阪・鐵道職員），160. 鵜近庄次郎（札幌・鐵道職員），161. 久保義郎（大連・陸軍齒科醫），162. 富永慶順（宇都宮・醫師），163. 園乾治（東京・慶大教授），164. 椎橋好（山梨・東朝記者），165. 高瀨正榮（札幌・高女教諭），166. 菅野尙明（東京・教員），167. 葛西藤太（青森・會社員），168. 大山竹次郎（青森・官吏）

附則第2項によるものは，今月號で發表の豫定でありましたが，まにあいませんでした。もう1ケ月お待ちくださいませ。（幹事）

普通　下記の諸氏は1月17日宮崎で施行の普通檢定試驗を受け合格されました

昭和15年2月1日
財團法人日本エスペラント學會
理事長　大石和三郎

70. 縞田縢（延岡），71. 山下イワオ，72. 大坪眞幸，73. 寺澤晋，74. 杉田笑子，75. 隈本綾子，76. 河野憲利，77. 藤田春雄，78. 﨑村德次，79. 木村ヤエ，80. 齋藤登喜子，81. 吉田愛子，82. 木村千惠子（以上宮﨑）（申込順）

普通試驗施行
東京・大阪・名古屋

したのとうり，普通試驗を施行します。

昭和15年2月12日
試驗委員會

期日　昭和15年3月17日（日曜）午後2時
場所　東京　學會事務所階上
　　　大阪　信濃橋交叉點角日清ビル內ワセダクラブ
　　　名古屋　昭和區山脇町 2ノ6 小坂邸
申込　3月5日までに，學會（または受驗地學會支部）あてに，住所氏名（ローマ字綴つき）明記，受驗料1圓をそえておもうしこみください。（振替東京 11325 番）
發表　合格，不合格は受驗者へ通知，合格者氏名は，學會機關誌で發表。

小坂狷二

諺集解義

3

27.—(a) Per pacienco venas scienco. (b) Post sufero venas prospero.

(a) 忍耐によつて學問は到來する。(b) 辛苦の後に繁榮が來る（苦あれば樂あり，雨降つて地固まる）。

28.—(a) Ne povas ĉiu homo esti pap' en Romo. (b) Kiun la sorto karesos, tiu sukcesos.

(a) 誰でもが皆ローマ法王になれるわけのものではない。(b) 運命が愛撫してくれる者が成功する（万人が成功すると云うわけにはゆかない）。

【註】 (a) papo 法王 (pap' en Romo と elizii されているのは『前置き』に述べた如く諺は口調をよくするため韻文體にする，玆には ritmo を jamba piedo（抑揚詩脚）—/—/ にするため）。Ĉi- 類相關詞を打ち消すときは『のこらず……に非ず』の意でなく，『(必ずしも)すべてが……に非ず(そうであるのもあるが，そうでないのもある)』の意，即ち部分打消の意となる（全部打消の意には neni- 類相關詞を用いる）。例：

Infanoj *ne* bezonas *ĉion* scii. 子供は何でもかでも知つている必要はない（知らぬでよい事もある）。

Ne ĉio brilanta estas diamanto. 光るもの必ずしもダイヤに非ず（光つていてもダイヤでないものもある）。

(b) Kiu*n*..., tiu...（その者を kiu*n*）運命が愛撫する(所のその)者は (tiu)……

29.—(a) Kia sono, tia resono. (b) Kia demando, tia respondo. (c) Kiu ĉion senpripense parolas, aŭdos tion, kion li ne volas. (ĉ) Kiu semas venton, rikoltos fulmotondron. (d) Kiu regalas per ŝtonoj, tiun oni dankas per bastonoj. (e) Kia la semo, tia la rikolto. (f) Kia ago, tia pago.

(a) 響あれば之に應じた反響あり（强く響けば强くこだまする）。(b) 問にはふさわしく返事あり（賣り言葉に買い言葉）。(c) 物事を不用意に(考慮なく)話す者は思いがけない言葉を聞かん。(ĉ) 風を種蒔く者は雷雨を收獲せん。(d) 石を以て（石を投げつけて）人に饗應する者は桿棒を以て感謝されん。(e) その種子にしてこの收獲あり。(f) その行いにしてこの報いあり（自業自得，因果應報）。

【註】 (a), (b), (e), (f) Kia..., tia— は Kia *estas*..., tia *estas*— を略した形：『……が然ある如く——も亦その如くである。』『此の父にしてこの子あり，親が親なら子も子』などは此の筆法で *Kia* patro, *tia* filo と譯せる。(a) re'son'o 共鳴，反響 (=eĥo). (ĉ) fulmo 雷(かみなり)，電光(いなびかり)，tondro 雷鳴；fulm'o'tondro 雷電を伴うあれ，雷雨。(f) pagi（買つたものに對して代價を）支拂う，（代價を）拂う，（恩に對して恩を）報いる，（仇に對して）しかえしをする：Ŝia fratino en ĉio estas kulpa; mi *pagos al ŝi por* tio ĉi! この子の妹がなんでもかでも惡いのだ，思い知らしてやるぞ。

30.—Ne helpas spegulo al malbelulo.

鏡は不美人の助けにならぬ（醜は鏡にうつしても醜，持つて生れたものはどうにもならない）。

【註】 helpi al *iu*（或人に）手助をしてやる，助力をする，（難澁するのを）救濟する，

救助する，(助けとなる，即ち) 役に立つ。亡ぼさるべき身を救命してくれは *Savu* min! (命ばかりはお助け)。水に陥ちて溺れかゝつている場合『助けて』は水から出るのを助力即ち救助してくれであるから *Hélpu* min!

Venu, *helpu al* mi *min levi*! こゝへ来て手傳つて起こしてくれ。

Dio, *helpu* al mi! これは困つた (神様御助勢下さい)。

Kiu mem *al si helpas*, al tiu ankaŭ Dio helpas. 自ら助くる (人の助力を借らずにやる) 者を神も助く。

Mi ne esperas, ke mi povos *min* (=al mi) *helpi*, mi ne povas fidi min mem. 獨りでやつてゆけそうにありません，自分で自分が當てにならぬのです。

En tiu ĉi okazo povas *helpi per* diversaj medikamentoj Doktoro I. 此の場合 I 博士が色々な薬劑を使つて直おしてくれるだろう。

Ĝi tamen *helpas*, se oni eldiras sian opinion. 意見を述べて置けば何とか役に立つものなのだ。

Nun *nenio helpos* (aŭ jam nenio helpas). もうこうなつたら萬事休すだ (救助の途なし)。

Mi *ne povas helpi* al tio. どうにもならぬ事だ (已の知つた事じやない)。

31.—(a) Urson al mielo oni ne tiras per orelo. (b) Petro rifuzas, Paŭlo ekuzas. (c) Ju pli da bruo, des malpli da ĝuo. (ĉ) Vinino eliĝis, kaleŝo senpeziĝis.

(a) 熊を蜂蜜のある處へ連れてゆくには耳をひつぱつて無理に連れて行くには及ばぬ，喜んでひとりで行く (それぞれ持つて生まれた習性はどうにもならぬ，人には夫々の好み，癖がある)。(b) 太郎はいらないと云い，次郎は (これは結構と) 使い出す。(c) さわぎが多ければ多い程樂み少し (人によつてはドンチヤンさわぎの好きな人があるがそれでは眞の慰樂にならぬ)。(ĉ) 女が馬車から下りると馬車が輕くなる (御婦人は兎角おしやべりで荷やつかいなもの)。

【註】 (a) mielo は熊の大好物の品。tiri per orelo はいやがるのを無理に連れてゆく所作。(c) Ju pli da bruo *estas* (aŭ *oni havas*), des malpli da ĝuo *estas* (aŭ *oni havas*) を補つて解せよ。(さわぎが) 多ければ多い程 (樂みは) 益々減少する。(ĉ) sen'pez'iĝi 目方がなくなる，荷がなくなる＝輕くなる malpeziĝi.

32.—En trankvila vetero ĉiu remas sen danĝero.

天氣が平穏な時には誰だつてもあぶなげなく舟が漕げる (條件さえよければ物事はやりやすい)。

33.—(a) Kie regas virino, malbona estas la fino. (b) Se edzino ordonas, domo ordon ne konas.

(a) 女が威をふるう (嬶天下の) 處では終りはろくでない。(b) 妻君が命令をすれば家は秩序を知らず (秩序を失う：牝鶏晨を告げて家門亂る)。

【註】 (a) Regi (主權者が國を) 治める，支配する，(主權者の如く) 威をふるう，はばをきかす。Ekster la domo *regis* mortiga malvarmo (plena mallumo, profunda silento). 家の外は殺人的な寒氣が威をふるつていた (眞の闇であつた，シーンとして靜寂であつた)。

34.—(a) Ne spiciĝas manĝo de mastrina beleco. (b) Edzin' admirata —edzo malsata.

(a) 主婦が別品だとて御馳走はおいしくならぬ。(b) 妻が歎賞される (チヤホヤされると) 夫は腹ぺこ (妻の見目よいのは夫の不幸)。

【註】 (a) spicoj (食物に味をつける) 藥味，香料；spici 食物に味をつける；spiciĝi＝esti spicita 食物に味がつく，おいしくなる。接尾字 -iĝ- が受身の意に用いられること多し；その場合の『發動者，起因』を示す前置詞は受身の場合の de (受身の意味に用いられている形容詞等の場合も然り)：

Li *ruĝiĝis* (=estis ruĝigita) *de* fonto. 恥かしくて赤くなつた。

Glaso *plena* (=plenigita) *de* vino. 葡萄酒でみたされたコップ。

Li estis tute *laca* (=lacigita) *de* vojaĝo. すつかり旅疲をしていた。

La tuta ĉielo estis *brila* (=briligata) *de* la norda lumo. 空は一面に極光で光りかゞやいていた。

35.—Virino scias—tuta mondo scias.

女が知ると全世界が知つてしまう (女はおしやべりだから內證事を女にもらせば世界中に知れ渡つてしまう)。

36.—Kie diablo ne povas, tien virinon li ŝovas.

惡魔が手におえぬ場所へ惡魔は女を押しやる (女はどこへでも勇敢に出しやばるものだ)。

【註】 Kie..., tie*n*— (そこに於て)……するその場所へ—— (Kie の方は方向の目的格になつて居らぬ，即ち ne povas の次には esti とか agi とかが略されているわけ)。

37.—(a) La plej danĝera homo—malbona in' en domo. (b) Malbona virino diablon superas. (c) Virino kolera pli ol hundo danĝera. (ĉ) Virina lango buĉas sen sango. (d) Ne ekzistas savo kontraŭ malbona virino.

(a) 最も危險な人間は家內の惡女 (山の神)。(b) 惡女は惡魔をしのぐ。(c) 怒つた女は危險な犬以上。(ĉ) 女の舌は無血で屠殺をする。(d) 惡い女にかかつては助かりつこはない (反抗し得ず)。

【註】 (a) in'o=virino.

38.—Virino havas haron longan kaj saĝon mallongan.

女の髮は長く智慧は短い (女の淺智慧)。

39.—(a) Virina ploro sen valoro. (b) Larmo virina baldaŭ sekiĝas.

(a) 女の淚は空淚(價値なし)。(b) 女の淚はじきに乾く。

40.—(a) Rol' de virino—bona mastrino. (b) Virta virino straton ne konas.

(a) 婦人の役割は善良な主婦。(b) 貞節な婦人は往來を知らぬ (出步るかぬ)。

41.—(a) Ĉiu estis junulo, ĉiu estis pekulo. (b) Pagas maljunaj jaroj por junaj eraroj. (c) Juneco ne scias, maljuneco ne povas.

(a) 誰でも(嘗ては)若者であつた，誰でも罪造りであつた (若氣のあやまちは誰にもある)。(b) 若い時の過ちを老年があがなう (若い時の過ちは老年になつてむくいが來る)。(c) 若年は無分別(無智)，老年は(智識が出來てももうその時は) 不可能。

【註】 (b) Pagi 代償を拂う：29〔註〕(f) 參照。

42.—(a) Jen havu! (b) Jen staras la bovoj antaŭ la monto!

(a, b) そーら (見ろ，ござつた)，すわ (大變，こまつたぞ)。

【註】 (a)『それ當然の目にあえ』。(b)『それ牛は山の前に立ちはだかつているぞ』。結局いずれもたゞ Jen! の意 (Jen vi havu viaĵon!)．困つた事，えらい目などに出遇つて

『そーれ見ろ，それござつたぞ，こりやえらい事になつたぞ』などの意の時口を突いて出る言葉。〔類例〕Jen vi havas! そら（お前の）いつものが始まつた，それ見たことか。

— Revizoro el Peterburgo, inkognite; kaj ankoraŭ kun sekreta ordono

—*Jen vi havas!*

『都から監察官がおしのびで來るです；しかも秘密命令を帶びてですな』『それござつたぞ！』

Nu, *jen vi havas*: mi sciis, ke ankaŭ tie ĉi vi disputos. そら始まつた，きつとこゝらでお前がひと文句つけるだろうと思つていたわ。

43.—(a) Ĝi havas ankoraŭ signon de demando. (b) Ĝi estas ankoraŭ vortoj de orakolo. (c) La sigelo ankoraŭ ne estas metita.

(a) それはまだ疑問符が付いている（眞僞未定の話だ）。(b) それはまだ御筆先きの言葉（神がかりの言葉であてにはならぬ）。(c) 印判がまだすわつて居らぬ（どうなるか未定の話だ）。

【註】(a) Signo de demando (de ekkrio, de cito) 疑問符？（感歎符！，引用符 „ "）。(c) 日本では證書其他に捺印をするが西洋では普通の場合は署名だけである。然し條約など公式な場合の sankcio には署名の他に紙上に赤い封蠟 sigelvakso をたらし，その上に封印 sigelilo を捺押する（rubandeto などを挿んで vakso を置くこともある）。從つて印判は木ではこげるから金屬製である。Meti la sigelon 捺印する（とは該件を承認決定する意=sankcii）。

44.—(a) Bone tiu sidas, al kiu la sorto ridas. (b) Facile estas danci, se la feliĉo kantas. (c) Nevo de papo facile fariĝas kardinalo. (ĉ) Al protekto kaj forto helpas la sorto.

(a)（その人に）運命が笑みかけてくれる者はゆるがず（坐りがよい）。(b) 幸福が歌つてくれれば舞うことはたやすい。(c) 法王の甥が法王廳樞密官になるのは容易である。(ĉ) 庇護と實力とには運命も加勢をする（權力者の庇護ある者や實力ある人は運命も加勢してくれる様にトントン拍子で成功する）。

【註】(a) Ridi (aŭ rideti) al *iu*（誰）に笑みかけて好意を寄せる；ridi je (aŭ pri) *iu* pro *io*.（何）がおかしくて（誰）のことを（あざ）笑う。(b, c)『何々するは易し，難し』は副詞形にして云う：

Maljunuloj *lernas malfacile* fremdan lingvon. 老人には外國語を學ぶことはむつかしい。

La letero estas skribita *facile* (malfacile) *legeble* 手紙は讀みやすく（讀みにくい）書かれている。

〔正誤〕1月號

1. (b) 誤 Mi blinde pafos.
 正 Mi blinde pafos, *eble trafos*.

10. (a) 誤 Neleĝe akirita ne estas profit*ita*.
 正 Neleĝe akirita ne estas profita.

三宅史平

動　詞

ただしい文章の作りかた　3

9
前月號の問題の答

1. 私は山田の弟と彼(山田)の庭園を散歩しました。

譯 Mi promenis kun la frato de Yamada en lia ĝardeno.

2. 私と山田の弟 (B) とは, 彼 (B) の庭園を散歩しました。

譯 Mi kaj la frato de Yamada promenis en lia ĝardeno.

3. 山田の弟 (B) は, 彼 (B) の友と彼 (B) の庭園を散歩しました。

譯 La frato de Yamada promenis kun sia amiko en sia ĝardeno.

前月號の問題に對する答はうえのとうりでありますが, 實のところ, これらのエスペラント文を, こんどは逆に, 日本語へ譯しかえそうとしますと, 1., 2. で, lia とあるのは, 「山田の」の意味か, 「山田の弟の」の意味かわかりません。(これは, もとの問題にしても, カッコをして說明してあるからわかるので, その說明がなければわからないのでありますから, おなじことでありますが。)

しかし, 實際問題になりますと, こうしたことは, たいてい, あとさきの文章の關係でわかるものでありますから, 心配はいりません。ここでは, ただ, lia と sia のつかいわけだけわかつていただけばよいのであります。

また, 2. の lia を sia としては, とお考えになるかたもあるかとおもいますが, それは誤りであります。とゆうのは 2. の主部は,

Mi kaj la frato de Yamada

であることは, すでによくおわかりのはずでありましよう。そして, この Mi kaj la frato de Yamada を代表する人稱代名詞はなにであるか, とゆうと

Ni

であります。そして再歸代名詞 si をもちいるのは, 主部が, 第3人稱, すなわち, li, ŝi' ĝi, ili, oni であるばあいにかぎられておることも, すでに御承知のとうりであります。Ni のうちから, li だけとりだして, それに對して si を使うとゆう器用なことはできません。

おなじように, §8 の 3'a. Li kaj lia frato promenis en *lia* ĝardeno とある, その lia も, 實は, 「"li" の」の意味か, 「"lia frato" の」の意味か, これだけでは, どちらにもとれます。しかし, これを sia とすれば, それは, 主部(すなわち "Li kaj lia frato") を代表することになりますから, 「彼等の」の意味になつて誤りであります。

10
述部のいろいろ

さて, §3 (1 月號) を, もう一度見てください。

そこには, 述部のいろいろいろのばあいがあげてあります。

そのうち, B. 「分類」については, §4 の問題1で, その例をあげましたし, Ĉ 「行動」については, おなじ §4 の問題2で, その例をあげました。そこで, ついでに, §3にあげてあるばあいの全部について, エスペラントの例文をあげてみましよう。

それには, あたらしく例文をつくるまでもなく, そこにあげてある例文を, そのまま, 譯すことにすればよいのでありますが, ただ A だけは, 文章を, すこし變えましよう。とゆうのは, 日本語では, 「ライオンがいる」, 「ダリアがある」と, 普通にいい, それで意味がよくわかりますが, エスペラントでは, 普通は, こうはいいません。

「ライオンがいる」, 「ダリアがある」と, 日本語でゆうのは, よく考えてみれば, 「そこにライオンがいる」, 「ここにダリアがある」とゆうような意味でありましよう。エスペラン

トでは，こんなばあい，かならずといつてよいくらい，いつも，それらの「存在の場所」をしめす言葉をそえます。

ですから，Aだけは，

ライオンがそこにいる

ダリアがここにある

といたします。

例によつて，主部と述部とにわけて書きましよう。

	主部	述部	
A	Leono	estas tie.	
	Dalio	estas ĉi tie.	存在
B	Leono	estas besto.	
	Dalio	estas floro.	分類
C	Leono	estas forta.	
	Dalio	estas bela.	性質
Ĉ	Leono	trinkas akvon.	
	Dalio	svingiĝas.	行動
D	Leono	dormas	
	Dalio	floras.	狀態
E	Leono	estas kaptita.	
	Dalio	estas ŝirita.	受動
F	Leono	maljuniĝis.	
	Dalio	plenfloriĝis.	成長
G	Leono	estas pli forta ol tigro.	
	Dalio	estas pli bela ol narciso.	比較

うえにあげた分類は，あらゆる場合をあげたものとゆうわけではなく，また，ひとによつては，その分類のしかたに，いろいろの意見もありましようが，それらについては，ここではふれないことにしましよう。

ここで問題にしたいことは，これだけ多く，いろいろなばあいがありながら，それらすべてに共通の點があるとゆうことであります。

その第1，それらが，いずれも，主部と述部から成りたつているとゆうこと，

第2，いずれも，主部一述部の順序でならんでいるとゆうこと，

第3，主部はいずれも名詞であるとゆうこと，

第4，述部には，かならず，動詞があるとゆうこと

などであります。

11
文に共通の點とは

うえにあげた共通の點，すべてが，あらゆるばあいにあてはまるか，どうか，そのひとつ，ひとつについて，まず，簡單にのべましよう。

第1. これについては，すでに，§1 にのべたとうり，主部のないばあいがあります。

くわしい説明は，あとにまわして，例をあげますと，

Venu al mi!

Bonvole donu ĝin al mi.

などのような，いわゆる「命令法」のとき，

Pluvas ekstere.

Neĝis tutan nokton.

などのような，天候に關する動詞，いわゆる「無主動詞」のもちいられるばあいなどであります。

第2. 主部と述部との順序は，おうくのばあいは，うえの例のとうり，主部一述部となつておりますが，ばあいによつては，

a. 述部一主部の順が普通であること，

b. なにかの理由で，主部一述部の順を，述部一主部と逆にすること，

c. 述部の文句が長いときに，都合によつては，それをふたつの部分に切つて，述部一主部一述部とすること

などがあります。

例をあげますと，

a. まえの章で，Aを

Leono estas tie.

Dalio estas ĉi tie.

としましたが，これは，便宜のため，こうしたのであつて，この例のような順序は，特別のばあいであつて，おうくのばあいは，むしろ，

Tie estas leono.

Ĉi tie estas dalio.

すなわち，述部一主部とゆう順序になるのが普通であります。くわしい説明は，あとにま

わします。

b. たとえば，C の

Leono estas forta.

Dalio estas bela.

を，forta, bela に力を入れて話をしようとするとき，

Forta estas leono.

Bela estas dalio.

とすることがあります。

c. これは，G のようなばあい，「虎よりも」，「水仙よりも」に力をこめようとして，

Ol tigro leono estas pli forta.

Ol narciso dalio estas pli bela.

とすることがあります。

第3. ここにあげた文例はたくさんありますが，これは，もともと，述部についての説明の材料として作つたものでありますから，これによつて，主部の性質をきめるわけにはゆきません。すくなくとも，名詞以外に代名詞が使われることは，すでにわかつているはずでありますが，そのほかに，いろいろのばあいがあります。

それについての說明は，あとにまわします。

第4. 述部には，かならず，動詞がある，とゆうこと，これだけは，あらゆるばあいに共通するといつてよいのであります。

これについては，日本人は，すこし注意をはらう必要があります。とゆうのは，日本語では，うえの，C, G のばあい，

C. ライオンは強い。

ダリアは美しい。

G. ライオンは虎よりも強い。

ダリアは水仙よりも美しい。

などのように，動詞のない述部もあるからであります。

しかし，エスペラントでは，述部には，動詞がかならず必要であります。動詞こそ，述部の本體でありまして，そのほかのものは，すべて，「おそえもの」であります。§8 で，「補足語」について書いたとうりであります。

さて，その述部の本體である動詞，それにも，ある制限が與えられております。どんな制限があるか，それをのべるまえに，述部の立役者である動詞の性質について，一應，研究してみましよう。

12

動詞の完全體と不完全體と

動詞の研究，これは，文章法の研究にあたつて，特に必要のことであります。その理由は，動詞が，文のなかで，いつも重要な役割をとげておるから，とゆうだけでなく，動詞は，そのほかの言葉にくらべて，動詞自身がはるかに複雑であり，また，さらに，文のなかでの動詞と，そのほかの言葉とのむすびあいが，一層複雑だからであります。

たとえば，

a. 動詞はいろいろな形に變化する。

b. それぞれの動詞自身のもつ意味によつて，文のなかで，他のことばとのむすびつきかたが，いろいろに變つてくる。

c. 接尾辭との關係が獨特である。

こうした復雑な動詞を研究するにあたつて，これを分類しますと，まず，

1. 他動詞と自動詞と，

2. 動態の動詞と靜態の動詞と（あるいは，動作の動詞と狀態の動詞と）

のようになります。

それに，まえの章にあげた「無主動詞」とゆうようなものもあつて，一般の動詞から區別されてよいわけであります。

これらは，それぞれの動詞の，もちまえの意味による區別であつて，文章法の研究にとつて，もつとも必要のことであります。

ところが，いずれの動詞にも共通に，語尾の形による變化があります。この變化は，おもに，基本文法の範圍でありますが，ここにも，文章法の問題としてみのがすことのできない重要なものがあります。まず，これからはじめましよう。

われわれは，エスペラントの學習の最初にあたつて，動詞については，まず，

動詞の語尾は，現在 -as, 過去 -is, 未來 -os, 假定法 -us, 命令法 -u, 不定法 -i である。

とおぼえました。

このうち，「現在」，「過去」，「未來」をひつくるめて「直說法」（または「直接法」）となづけることは，忘れたひともあるでしよう。

これを表にいたしますと，

不定法		-i
直說法	現在	-as
	過去	-is
	未來	-os
假定法		-us
命令法		-u

となります。

このように，基本文法では，「法」による區別が重要でありますが，文章法では，直說法，假定法，命令法の3つには，ほとんど區別がいらないくらいであります。命令法は，いくぶん區別する必要もありますが，それほど重要とゆうほどではありません。

はつきり區別しなければならないのは，不定法と，そのほかの3つの法をあわせたものとであります。

區別する以上，なまえのあるほうが便利でありますから，つぎのようになづけることに約束しましよう。

不定法 ——	**不完全體**
直說法 假定法 命令法	**完全體**

こうゆうふうに，動詞を，不完全體と完全體とにわけますと，§10にあげた例は，すべて完全體であることがわかります。そうです。これが，うえに，動詞のうちでも制限があるといつたところであります。そこで，

述部には，かならず，完全體の動詞がある。

とゆうことができます。

いままで，文（propozicio）とゆう言葉をたびたび用いましたが，その定義は，まだ，すこしもわかつていませんでした。しかし，うえにのべたことによつて，文であることについての絶對的の條件のうち，すくなくとも1つは，はつきりしました。すなわち，

文が成りたつには，かならず，完全體の動詞のあることが必要である。

とゆうことであります。

LETERO EL ROMO

Antaŭ kelkaj tagoj, ni ricevis 3 ekzemplerojn de la Revuo Orienta, kun la indiko legi sur paĝo 16-a. Kun surprizo ni vidis presigita, sub la rubliko "Krestomatio kreskanta" unu el niaj pl j interesaj paroladoj, nome—: Vidaĵoj el la vojo de la Dolomitoj—.

Ni sciigas ke la novembra numero de via eldonaĵo faris grandan impreson al ĉiuj el niaj estraranoj, kaj precipe al la direktoro de la ENIT kiu estas la oficejo kiu precipe zorgas pri la italaj turismaj aferoj.

Tiu ĉi spirita kaj literatura kunlaborado estas de ni tre ŝatata.

La seriozeco per kiu vi manipulas Esperanton, la riĉeco de la Revuo, la reguleco de ĝia aperado, ties longdaŭra vivo devigas nin gratuli vin, kaj instigi al plua laboro.

La samon ni ja estas farantaj, kaj la samideanaro el ĉiuj landoj laŭdas nian laboron, petas pri persisto, sciigas pri regula aŭskultado de niaj dissendoj, certigas pri daŭra fideleco al nia laboro sur la radiofonia kampo.

En tiuj ĉi lastaj tempoj, precipe la amerikaj geesperantistoj plendis por tio, ke ili ne povas aŭskulti la "voĉon de Romo". Kaj fine, ni kontentigis ilian entuziasmon, dediĉante por ili apartan dissendon de nia bulteno enhavantan la semajnan revuon pri politikaj okazaĵoj.

Nu, komencante de Januaro 1940 ni disradiigos la "Informojn" ĝuste por la nord-amerikaj samideanoj, ĉiumarde je la 2-a horo (MET) per 5 mallongaj stacioj samtempe, nome 2 RO 3 (31, 15); 2 RO 4 (25, 40); 2 RO 5 (19, 61); IRF (30, 52); IQY (25, 70). La amerikanoj devas aŭskulti laŭ la jenaj respektivaj horoj: lunde je 8-a h. ptm. en EST.; je 7-a h. ptm. en CST.; je 6-a h. ptm. en MST.; je 5-a h. ptm. en PST.

Bonvolu akcepti niajn korajn dankojn kaj se eble transdoni nian saluton al la tuta japana esperantista familio.

Al via Instituto prospekton, al la direktoraro bonfarton dezir s

LA DIFINA ARTIKOLO 定冠詞

El LINGVO STILO FORMO

1. Nek en la Fundamento de Esperanto, nek en la Lingvaj Respondoj de Zamenhof oni trovas striktan regulon pri la uzo de la difina artikolo *la*. Kaj tial la difina artikolo estas konstanta problemo por tiuj, en kies lingvo ĝi ne ekzistas. Precipe la rusoj preskaŭ ĉiam mistrafas en ĝia uzo. Tute ne uzi ĝin, kiel Zamenhof iam rekomendis al la dubandoj, laŭ mia opinio ne estas kontentiga solvo. Estas vere, ke *superflua* artikolo pli ĝenas ol la *manko* de artikolo tie, kie ĝi devas stari, sed ankaŭ ĉi tiu lasta estas stileraro, kiu multfoje malfaciligas eĉ la komprenon. Oni devas iel starigi striktajn regulojn, kies scio klarigas

基礎
嚴密な。規則
恒久の。問題
まちがう
すすめた
疑惑者。滿足な。解決
餘計な。缺乏
文體的誤り。理解
説明する

Lingvo Stilo Formo Lingvoj studoj de K. Kalocsay, eld. de Literatura Mondo, Budapest, 1933. Enhavo: Esperanta vortfarado; La evoluo de nia poezia lingvo; Sendemandaj respondoj; La Esperanta rimo; Esperanta elparolo; Pri la Esperanta rimo; Klasika ritmo en Esperanto; La mezepoka Esperanto. La supra teksto estas ĉerpita el "Sendemandaj respondoj."

註 1. **Fundamento de Esperanto** は1905年の第1回大會で「エスペラントの基礎」として，絶對に變更をゆるされないと宣言された「全文法」(16ケ條)，「練習句集」，「普遍語彙」から成りたつている。この「全文法」に，§1 Artikolo nedifinita ne ekzistas; ekzistas nur artikolo difinita (*la*), egala por ĉiuj seksoj, kazoj kaj nombroj とある。

Lingvaj Respondoj （岡本好次氏 和譯「リングヴァイ・レスポンドイ」がある）は，ザメンホフが，"La Esperantisto" (1889-1893), La Revuo (1906-1908), "Oficiala Gazeto (1911-1912) などで，言語的な質問に答えたものを，のちに集めて單行本にしたもの。

Tute ne uzi ĝin, kiel Zamenhof rekomendis 上記の「練習句集」に，§27 La artikolo "la" estas uzata tiam, kiam ni parolas pri personoj aŭ objektoj konataj. Ĝia uzo estas tia sama kiel en la aliaj lingvoj. La personoj, kiuj ne komprenas la uzadon de la artikolo (ekzemple rusoj aŭ poloj, kiuj ne scias alian lingvon krom sia propra), povas en la unua tempo ne uzi la artikolon, ĉar ĝi estas oportuna sed ne necesa. とあり，また Lingvaj Respondoj にも，Ofte vi ripetas pri la maloportuneco de la artikolo *la*. Sed la artikolo estas ja vorto tute aparta kaj sur la konstruon de la frazoj ĝi havas nenian influon; tial, se vi volas, vi povas tute ĝin ne uzadi, almenaŭ ĝis la tempo kiam vi tute bone scios ĝian signifon. とある。

superflua artikolo pli ĝenas ol la

kaj instruas la uzon de la artikolo por ĉiuj. Ĉi tiujn regulojn mi klopodas nun fiksi.

2. Oni devas uzi la artikolon:

3. 1. *se temas pri io jam konata, difinita, jam priparolita.* Ekzemple: Edzino, aĉetinta ĉapelon sen la scio de la edzo, surprizis lin agrable per la deklaro: "Mi aĉetis ĉapelon." Sed se ili antaŭe jam intencis aĉeti kune *iun certan* ĉapelon, eble eĉ marĉandis pri ĝi, kaj poste la edzino ĝin aĉetis en la foresto de la edzo la deklaro tekstos: Mi aĉetis *la* ĉapelon." El ĉi tiu deklaro, la edzo, se li bone scias la uzon de la artikolo, certe scios, ke temas ne pri ia ajn, sed nepre pri *tiu certa* ĉapelo. Alia ekzemplo: Mi ricevis leteron de UEA (ia ajn, neatenditan). Mi ricevis *la* leteron de UEA (tiun certan, kiun ni atendis, pri kiu vi scias, pri kiu ni jam parolis). Aŭ: "Mi vidis sinjoron irantan kun ses hundoj," — mi diras al mia amiko. La sekvan tagon mia amiko diras al mi: "Mi vidis *la* sinjoron irantan kun ses hundoj." Ĉar temas pri konata, jam priparolita sinjoro. Kiel oni vidas, en la supraj ekzemploj oni povas anstataŭigi la artikolon per *tiu*, aŭ *tiu certa.*

4. 2. *se temas pri io, kiel pri reprezentanto de sia klaso, kategorio.* Ekzemple: *La* homo (ĉiu estaĵo apartenanta al la kategorio homo) estas dupieda, senpluma besto. Same

きめる
問題にする
帽子
驚かす。宣言
企てた
一定の。値切る
不在
待ちうけぬ
翌日
代える
代表者。部門
部屬

manko — "Lingvaj Respondoj" に, Tute vane vi faras al vi multe da klopodoj kun la uzado de la artikolo. Vi devas memori, ke en nia lingvo la uzado de la artikolo ne estas deviga; sekve la plej bona maniero de agado estas jena: uzu la artikolon tiam, kiam vi scias certe, ke ĝia uzado estas necesa kaj postulata de la logiko, sed en ĉiuj *dubaj* okazoj tute ĝin ne uzi. Pli bone estas ne uzi la artikolon en tia okazo, kiam ĝi estas necesa, ol uzi ĝin tiam, kiam la logiko kaj la kutimoj de ĉiuj popoloj ĝin malpermesas. Se vi ekzemple diros "venis tago, kiun mi tiel longe atendis», via frazo estos ne tute bonstila, sed ne rekte erara, kvankam oni devus tie ĉi diri "*la* tago"; sed se vi diros "hodiaŭ estas la dimanĉo" anstataŭ "hodiaŭ estas dimanĉo", tiam vi faros rekte *eraron*, kiu estos malagrabla por la oreloj de ĉiu bona Esperantisto. とある。このうち, "kiam logiko kaj la kutimoj de ĉiuj popoloj ĝin malpermesas" とある, logiko に反するものとは,「たれか(見知らぬ) 紳士が來た」とき "La sinjoro venis." とゆうがごときであり, 各國民の kutimoj に反するとは, うえの例のように, 曜日に la をつけるようなばあいである。とはいえ, この習慣にも, 各國民によつて, いろいろのちがいがあるから, 今日では, エスペラントには, エスペラントの習慣があると考えてよい。

mistrafi 「(鐵砲や弓で射て) あてそこねる」,「的をはずれる」,「見當ちがいをやる」。erari は「誤ちをおかす」, このところは mistrafas のかわりに eraras を用いてもさしつ

en pluralo, se temas pri la tuta klaso, tuta grupo, ĝenerale, aŭ ankaŭ pli malvaste. Ekzemple: *La* hundoj estas fidelaj bestoj. *La* arboj (ĉiuj arboj) printempe floras. Oni elhakis *la* arbojn apud la vojo (ĉiujn arbojn, kiuj estas apud la vojo). Sed: Oni elhakis arbojn (kelkajn, plurajn, multajn, malmultajn) apud la vojo. En ĉi tiuj okazoj do oni povas anstataŭigi la artikolon per *ĉiu, ĉiuj* (*ambaŭ*).

複數
伐り拂う

5. 3. *se temas pri io unuunura, sola en sia speco.* Ekzemple: *la* ĉielo, *la* firmamento, *la* suno, *la* tero. Servisto kuras en la ĉambron, kriante: "Mortis ĉevalo." Tio signifas: mortis iu nedifinita el la ĉevaloj. Sed se li krias: "Mortis *la* ĉevalo," tio signifas ke mortis *la sola* ĉevalo, kies morton oni atendis. Aŭ: Li estas Esperanta verkisto (unu el multaj). Li estas *la* Esperanta verkisto (tiel eminenta, ke li povas kvazaŭ sola pretendi la titolon Esperanta verkisto).

唯一の。種類
蒼穹
不定の
優れた。名稱

6. Resume: oni uzu la artikolon, se al la respektiva vorto estas antaŭmeteblaj, sen la ŝanĝo de la senco, la jenaj vortetoj:

結局。それぞれの

tiu, tiu certa ĉiu, ĉiuj sola, unuunura

Oni ne uzu la artikolon, se estas antaŭmeteblaj:

iu, ia, kelka, kelkaj, peco da, multa, multaj, pluraj.

かえない。

stari「立つている」とは「ある」こと。esti, troviĝi, kuŝi いずれでもよい。

stil'eraro「文體的誤り」。la のあるべきところにないのは，文法的には誤りといえないが，文體的には誤りであるごときである。

starigi「(いままでないところへ，あたらしく) たてる，据えつける」，**fiksi**「(しつかりと，動かぬように) とりつける，きめる」。

3. **sen la scio** の la はないほうがよい。(説明はしたにのべる)。

iu「(話すほうでわかつていても，わかつていなくてもよい，どれかわからぬ) ある」。**certa**「(話すほうで，どれとわかつていて，聞くほうでわかつていない) 一定の」。

teksti「……とゆう文句から成りたつ」。

4. **kategorio homo**「人間なる部屬」。

5. **unu'nura**「唯一の，ひとつきりの」**sola**「單獨の」**io unuunura** とは，「天」，「太陽」などのように，ふたつとないもの。

sola en sia speco 世界に「王」は幾人もあるが，そのうち「イングランドの王」は1人きりである。それゆえ，單に「王」とゆうときには reĝo であるが，「イングランド王」とゆうときには，*la* angla reĝo である。しかし，これも，イギリス人だけのあいだで，「(イングランド) 國王」について話すときには，unuunura のものとなつて，la reĝo である。

6. **sen la ŝanĝo** の la はないほうがよい。これは，うえにある sen la scio とおなじく，ここに著者自身のべている實驗をやつてみても明かである。これらは，どちらも，sen ia scio または，sen ia ŝanĝo であるべ

自己検査

7. Per ĉi tiu memkontrolo oni bone povas sin helpi okaze de dubo.

任意の

8. Ekzemploj: folio de arbo: arbfolio (iu, laŭplaĉa);
folio de la arbo: iu, okaze trafata, laŭplaĉa folio de certa, difinita arbo;
la folio de arbo: certa, difinita arbfolio;
la folio de la arbo: certa, difinita folio de certa, difinita arbo: aŭ folio de tiu arbo ĝenerale.

鋸歯形の

(Ekz.: la folio de ĉi tiu arbo estas dentumita.)
folioj de la arbo: kelkaj aŭ multaj arbfolioj;
folioj de la arbo: kelkaj aŭ multaj folioj de certa difinita arbo;
la folioj de arbo: certa, difinitaj arbfolioj;
la folioj de la arbo: ĉiuj folioj de certa arbo.

所有代名詞

9. Krome oni povas uzi artikolon anstataŭ la poseda nomo *sia*. Ekzemple: Li vundis la manon. Li rompis al si la kapon. Ĝentile li levis la ĉapelon.

動詞性名詞

働掛の。受身の

10. Ĝenerale oni uzas artikolon antaŭ vervosubstantivoj, kiuj estas ligitaj kun la aktiva aŭ pasiva aganto per la

きだから。(la をつけた理由は 10. にあるが)。

7. sin helpi (per)「(……で) 自分を助ける」とは「(……を) (自分の) 役に立てる」。

9. poseda pronomo "sia" ここにゆう sia は，第3人稱の sia にかぎらず，これとおなじ役割(すなわち「再歸」のばあい)の第1人稱，第2人稱の mia, nia, via などをも含むと考えるべきである。Mi sidiĝis sur la genuojn. Levu la manon. のように。

Li rompis al si la kapon.=Li rompis la kapon.

10. verbosubstantivo 文法的な形は名詞 (=語尾 -o) であるが，語根が動詞的意味を持つもの。(例: manĝ(ad)o, parolo)。

aktiva aŭ pasiva aganto aktiva aganto は，Hirundoj anoncas la alvenon de la printempo の printempo のように，(alveni) **する**もの。(これは，その動詞性名詞を動詞にすれば，La printempo alvenis, のように，文の**主語**になる)。pasiva aganto (むしろ pasiva ag*ato*) は，Ni atendis la malfermon de la pordo の pordo のように (malfermi) **される**もの。(これは，動詞性名詞を動詞にすれば，Oni malfermis la pordon. のように**目的語**になる)。

11. Sed antaŭ adverboj neniam. 最上級の副詞のまえに la をつけることは，論理的に誤りであるとゆう意味。la は名詞につくものであるから，形容詞 (それは名詞を修飾するもの) のまえにはつくが，副詞 (それは，名詞以外のものを修飾するもの) のまえにつくことは不合理であるからである。(したがって，その副詞が形容詞を修飾しているばあいは，當然 la がつくわけ。例: la plej pompe

prepozicio *de*. Ekzemple: Hirudoj anoncas *la* alvenon de la printempo. Min tre ĉagrenas *la* perdiĝo de la letero. Ni atendas *la* malfermon de la pordo.

11. Oni uzas la artikolon antaŭ superativo. (La plej bona vino, la plej bela knabino.) Sed antaŭ adverboj *neniam*. (Estus plej bone; li plej multe amas sin mem).

最上級　副詞

12. Artikolo devas stari antaŭ adjektivoj, se ili estas uzataj anstataŭ substantivoj. (La Ĉiopova; ĝi estas la mia; unu al la alia; la fortaj helpu al la malfortaj; mi sopiras je la kara; li ne povas distingi la malbonan aferon de la bona.)

形容詞　名詞。全能の　區別する

13. *Sen* artikolo povas esti *abstraktaj vortoj* kaj nomoj de *materialoj*. (Amo estas donaco de Dio. Fero estas metalo. Oro ne rustas. Drinko estas danĝera pasio.) Sed se ili havas adjektivon, aŭ al ili rilatas genetivo, la artikolo ne povas manki antaŭ la subjekto. (La fero de Svedujo estas tre bona; la miksita oro estas pli malkara: la sincera amo estas granda trezoro; la ofta drinko ruinigas.

抽象的の　物質　所有格　主體

14. *Sen* artikolo estas la *personaj nomoj* kaj *Dio*. Same la land- kaj urbonomoj. Sed la river- kaj montonomoj *havas* artikolon. (Karlo, Urugvajo, Londono, la Monto Blanka, la Danubo.)

ekipita)。しかし，實際的には，Zamenhof の文例にも，la plej —e の形はたくさんあるしまたそのほうが便利でもある。とゆうのは，plej は比較最上級に使われるのみでなく，絶對最上級（tre をつよめた意味）にも使われており，比較最上級には la をつけ，絶對最上級には la をつけていないから，副詞のばあいにも，この區別をはつきりさせるために，比較最上級に la をつけることをゆるせば便利である。これも，新しく提案するならば困るが，ザメンホフはじめ，ひろく用いているのであるから，用いてさしつかえない。

13. **ĝi estas la mia** こうした用いかたは文法的に誤りであるとする説がある。(この立場については，本誌昨年7月號，岡本氏「高等試驗〉法答案講評」(p. 9) にくわしく説明されている)。しかし，これも，ザメンホフをはじめ，おうくのすぐれた作家に用いられてはいるし，便利であるから用いてよいとおもう。(例：a. Kies ĉapelo ĉi tiu estas? Tiu estas mia.「それは，ぼくのです」。b. Kiu estas via ĉapelo? Tiu estas la mia.「それが，ぼくのです」。a. のほうでは，問題の中心は持主であり (=Tiu apartenas al mi), b. のほうは，問題の中心は帽子である (=Mia *ĉapelo* estas tiu), したがつて，a. のばあいには，そのあとに ĉapelo が略されている氣持がすくないが，b. のばあいは ĉapelo が略されていることがはつきりしている。これの用い方はイギリス語の所有代名詞 mine, yours とはいくぶんおもむきを異にしている)。しかし，このばあい，この區別がのみこみにくければ，むしろ，la は，つけないほうが安全である。(Kalocsay は，うえの例 a. のばあいも la

形容言

樞密院議員

15. Artikolo devas stari antaŭ la propraj nomoj, se ili havas *adjektivan epiteton.* (La bona Dio; la perfida Efialtes; la kuraĝa Petro; Johano la Brava; Rikardo la Leonkora; Natan la Saĝa; la du fratoj van Buck; la brila Parizo; la potenca Britujo.) Sed se la epiteto estas *substantiva,* la artikolo mankas. (Reĝo Filipo; reĝino Kleopatra; Imperiestro Rudolfo; Sekreta Konsilanto Huber; Malsaĝulo Peĉjo; Saĝulo Natan; Sinjorino X; Doktoro Esperanto). Nur la *river-* kaj *montnomoj,* kiuj havas artikolon ankaŭ solaj, havas ĝin ankaŭ kun substantiva epiteto. (La rivero Danubo; la lago Bajkal; la monto Gerhardo.)

例外的に

至福の

16. Mankas la artikolo, esceptmaniere, antaŭ la adjektivaj epitetoj *sankta, beata* (en eklezia senco). Ekzemple: Sankta Johano: Beata Angeliko.

17. Se la propraj nomoj esprimas kvazaŭ ideon, modelon kaj rilatas al iu persono, ili *havas* artikolon. Ekzemple: Katarina, la Semiramis de Rusujo; Johano estas Herkulo de la vilaĝo.

— *K. Kalocsay* —

K. Kalocsay vidu R.O. 1939, p. 39.

mia と考えているように思われる。)

13. **genetivo** エスペラントには「所有格」はないことになつているが, それは, 單語の形として「所有格」がないのであつて, ほかの國語の「所有格」にあたるものは前置詞 de をつけることによつてあらわされているわけである。したの例の La oro *de Svedujo*

14. **sed la river- kaj montonomoj havas artikolon** これは著者の dogmo である。la Monto Blanka (モンブラン) のように, 普通名詞から成りたつているばあいは一般の monto blanka (白い山) と區別するため, la をつけるのもよいが, すべての個有名詞には la をつけないとゆうのを原則として, Danubo などには, つけないほうがよい。ただし, そのまえに, それの同格の意味で rivero (したがつて, 小文字ではじまる)をつけるときには, la rivero Danubo とすべきである。(Monto Blanka のばあいの Monto は Blanka と同格でなく, Monto Blanka で, ひとつの個有名詞になるのであるから, そのまえに la をつけるのは便宜のためとゆうことになる)。(Kalocsay も, のちに Plena Gramatiko では, Danubo, Tamizo; la Monto Blanka, la Ruĝa Maro のように改めている)。

15. **epiteto**「形容語」。adjektivo「形容詞」は, 語尾 -a をもつ單語すべてのことであり, epiteto は, 形容詞にかぎらず, 名詞に直接ついて, それを修飾するもの。例: la *bona* Dio, *Reĝo* Filipo, pozo *alsalti.*

Sekreta Konsil'ant'o (=imperiestra *aŭ* reĝa konsilanto) 樞密顧問官。

Sinjorino X X は, *kso* とよむ。q=*kvo*, w=*duobla v*, y=*greka i.*

Uloj por Justeco

SIGA-NAOYA

II

Enketo ĉe la policejo estis rimarkinde longedaŭra. La veturigisto asertis ke eĉ la elektra bremso ne povis savi la knabineton, ĉar ŝi falis rekte antaŭ la vagono. La laboristoj neis tion kaj diris, ke konsternite la veturigisto tute forgesis pri la elektra bremso kaj ke la distanco inter la knabineto kaj la vagono estis komence sufiĉe granda, kaj tial se li nur tuj ekuzus la elektran bremson, li ne mortigus ŝin. La inspektisto klopodis interhelpi inter ili, sed vane; la tri personoj tute ne volis al li aŭskulti. Kaj intertempe ili sin turnis al la veturigisto kaj diris kun malica rigardo, "Vi, sentaŭgulo!"

Kiam ili tri forlasis la pordon de la policejo, jam estis preskaŭ la naŭa horo. Veninte al la luma vespera strato, ili trovis sin ial en gaja humoro kaj marŝis rapide sen ia celo. Kaj ili sentis ke ia neesprimebla komforta ekscitiĝo resonas inter ili. Ial ili volis paroli per tono pli triligita ol kutime. "Hej, ĉu vi ne konas nin!" tiel ili preskaŭ volis diri eĉ al preterpasantoj.

"Fi! Ĝis kiam ajn oni disputas, maljustaj estas maljustaj!"

La pliaĝa viro kun ronda vizaĝo laŭte diris:

"Alproksimiĝante min survoje la fi-inspektisto diris—'He, kamarado! Por kio okazis estas jam nenia rimedo. Mi diras, ankaŭ vi ĉiuj vivas de laboroj de la sama kompanio!'—Kion diri? Mi preskaŭ estus malkovrinta tion antaŭ la polica komisaro, sed..."

"Ve! Kial vi ne malkovris tion!..." kun profunda bedaŭro diris la junulo kun tubero. En la vespera strato tamen sin trovis kiel kutime nenia ŝanĝo. Tion ili sentis iel nekontentiga. Ĵinrikŝo preterpasis forlasante subitan riproĉon sur ilin. Ili sentis eĉ tian sensencaĵon kiel malpravan insulton. En vagado ili eksentis tian abomenon ke bonhumora ekscitiĝo perdiĝis iom post iom. Kontraŭe, ili komencis senti malkontenton ke ili povas ricevi nenian rekompencon, kion ili meritas. Ili ne povis deteni sencese ion paroli. Baldaŭ ili preterpasis la lokon, kie ili laboradis en la tago. Kiam ili venis al la punkto, ĝute kie la knabineto estis mortigita de surveturado, ĝi troviĝis jam ree en ordinala stato. Ili sentis tion ial eksterordinala. Kiam ili ekhaltis tie,—"Tro sensenta!"—tiamaniere, ili ne povis ne senti malkontenton kolere pri tio.

Kiam ili venis antaŭ la polican gardejon ĉe la fino de la ponto, ili trovis tie ne tiaman, sed alian tre junan policanon eble novican, starantan afekteme

sub la ruĝa elektra lampo. "Hej, ĉu ni demandu al la policano kian finiĝon trovis la afero?"

"Ne, ne! Se ni demandus tion, jam nenio helpas."

Sekvante tion la pliaĝa diris, "Ŝercon ne faru! — Nu, mi ja ne povas teni min pro malsato." Kaj preterpasinte la gardejon li returniĝis al la policano, kiu sekvis ilin per la okuloj kvazaŭ koleraj.

"Ha, ha!" Ridante konscie laŭte pro malagrabla sento la pliaĝa daŭrigis, "En malfavora okazo, morgaŭ ni perdus la okupon por kelka tempo."

"Ne dirante pri malfavora okazo, tio estas ja decida!" diris la juna viro alia ol tiu kun tubero. Tion dirante, la junulo rememoris en si pri la maljuna patrino, kiu atendas lin sub la malhela lampo.

"Antaŭ ĉio, ni trinku!" diris la pliaĝa.

Ili venis al Kayabatyo ankoraŭ en humoro ial netrankvila, kaj ili tie eniris en grandan bovaĵejon. Sur la dua etaĝo ankoraŭ estis grupoj da gastoj, kiuj inter si parolis manĝante bovaĵon de sukijaki. Estis ankaŭ duopaj gastoj, kiuj enverŝas sakeon unu en la tason de la alia kaj interparolas kun gravŝajne mallaŭtigita voĉo, interproksimigante la ruĝiĝintajn fruntojn. Fiksinte sian sidejon, la tri laboristoj tuj ordonis sakeon kaj bovaĵon kaj sidiĝis tie sur la krucigitaj kruroj. Kaj ili sentis sin en humoro iom kvietigita, sed ili ne povis ĉesi la interparolon pri la afero. Konsciante apud si gastojn kaj servistinojn, ili ne povis deteni sin eĉ ĉi tie por ne ankoraŭfoje ripeti pli laŭte tion, pri kio ili jam survoje estis entuziasme parolinta.

La servistinoj jam sciis pri la okazo. Kaj kelkaj tuj sidiĝis ĉirkaŭ ili. "Vere, la kapo kaj brakoj estis disŝiritaj. Vidinte tion la patrino fariĝis tiel freneza ke..." Finfine la afero estis parolata tute ŝveligite. Sed la tri viroj preskaŭ ne sentis tion mirinda. Kapjesante la servistinoj aŭskultis al ili kvazaŭ kortuŝite kun duonfermitaj okuloj.

La pliaĝa viro kaj la junulo kun tubero trinkis konsiderinde multe. Ambaŭ alterne ripetadis detale eĉ pri la diskuto ĉe la policejo. Kaj inter paroloj ili ofte enmetadis vortojn "Kiel oni skribos tion ĉi en la morgraŭaj ĵurnaloj!"

Interrompante siajn interparolojn la gastoj sur la tuta etaĝo ĉiuj komencis atente aŭskulti al la tri viroj. Ili sentis sin por la unua fojo kontentigitaj pri tio, kion ili sentis ĝis tiam ial tre malkontentiga depost ili forlasis la policejon. —Tamen, tio ne daŭris longe. Antaŭ ol estis elĉerpita la parolo, kiun ili volis nepre daŭrigi, jam la servistinoj foriris unu post alia kaj fine ili ĉiuj forlasis ilin por rearanĝi tablojn de foririntaj gastoj. Ili restis denove nur tri. Jam estis preskaŭ la 12-a horo, tamen la pliaĝa kaj la juna kun tubero ne volis

facile ĉesi trinki. Denove ili restis en humoro netolereble malkontenta kaj kolera kiel antaŭe. Ebriiĝinte la pliaĝa, kiu komence sin tenis ne tiel, ekscitiĝis la plej forta. "Certe ni vivas de la laboroj de la kompanio. Sed maljustaj estas maljustaj. Kion signifas eĉ se ni estus forpelitaj! Ni ne estas tiuj, kiuj timas tian minacon!" Tiamaniere sensence li sola laŭte insultadis.

Baldaŭ, la junulo sen tubero diris,

"Jam mi foriros!"

"Fripono!" diris kvazaŭ lin frapante la pliaĝa.

"Havante tian malĝojon en la koro, kiel oni povus dormi hejme!"

"Tute ne!" tuj respondis la junulo kun tubero.

Jam estis sufiĉe malfrue, kiam la forte ebriaj du personoj foriris de la flanka pordeto de la bovaĵejo per necertaj paŝoj kun plendoj pri la alia, kiu nerimarkite malaperis. Tramoj jam ne veturis.

Ili ambaŭ ekveturis de najbara ĵinrikŝejo al bordela kvartalo ne malproksima de tie.

"Mastro, kiel bonhumora!" kurante diris unu el la rikŝistoj.

"Kial povus estis...!" respondis la junulo kun tubero. Okaze de tio tuj li komencis ankoraŭfoje rakonti la aferon. Ankaŭ la rikŝistoj bone sciis pri tio.

"Ha! Laŭ onidiro iuj koncernantaj al rellaboro kunsidis kiel la atestantoj. Tio ja estis vi, mastroj!"

Strato restis kvazaŭ balaita tute sen bruo kaj aspektis pli larĝa ol en la tago. Laŭta parolo sonis tra la stratoj. La pliaĝa en la antaŭa ĵinrikŝo skuate veturadis, klinanta sin kiel mortinto malrigide sur kotŝirmilo. La junulo sekvanta pensis, "Li endormiĝis."

Ili iris trans la Eitai-ponton.

"Hej, ĉi tie!...Estis ĝuste ĉi tie!" diris la malantaŭa junulo al la rikŝisto.

Aŭdinte la voĉon, la pliaĝa, kiu restis ĝis tiam kvazaŭ mortinta, levis la kapon.

"Oh, estis ĉi tie...Momenton haltigu!...Ve e, mi volas mallevi min por momento!" Li plorsinglutadis.

"Jam ne bezonas! Jam ne bezonas!" Kun laŭta voĉo la junulo kun tubero detenis lin.

"Nepre. Delasu min iom da momento!" dirante tiel en plorado li volis stariĝi sur ŝtupeto de ĵinrikŝo.

"Ne, ne!" diris la junulo kvazaŭ li lin riproĉas.

"Mia junulo, ne zorgu! Nur rapidu!"

Ĵinrikŝo kuris senhalte.

Jam la pliaĝa viro ne volis mallevîĝi de la rikŝo. Kaj denove sin klinante sur la kotŝirmilo li laŭte ekploris. (La fino)

Trad. de Eskulapida Klubo

El Manĝuraj Legendoj

Sepkolora Ponto

Antaŭ ĉirkaŭ dek jaroj sur la rivero Non-ko konstruiĝis fera ponto nomata Ko-kjo. En la ĉirkaŭaĵo de tiu ĉi ponto restas legendo pri fiŝkaptejo de la rivero.

×

En la malnova tempo tie vivis knabino flore bela.

Iun nokton ŝi ĵuris amon kun iu junulo en rosoriĉa herbaro. La junulo en fakto ne estis homo sed blanka leporo loĝanta delonge en la ĉirkaŭaĵo. La knabino tute ne sciis pri tio kaj por la junaj geamantoj pasis kelkaj feliĉaj noktoj.

Sed la feliĉo ne daŭris longe. La ĉefo de tre malproksima tribo trans la rivero enamiĝis al la knabino kaj spite de ŝia volo li edzinigis ŝin. Pro arda sopiro al la amatino la junulo volis sekvi ŝin. Sed ve, li estis leporo—kiel transiri la riveregon!

La jaro pasis en lia senfina ĉagreno.

En la sekvanta jaro, iun tagon de la senpluva somero, sur la hela ĉielo ekaperis peceto da nubo, kiu subite etendiĝis kaj post momento kovris la tutan ĉielon. Ekpluvegis tiel dense, ke oni ne povas distingi ĉirkaŭon.

Post baldaŭ, kiam la pluvo ĉesis, sur la klare sereniĝinta ĉielo aperis sepkolora ponto, kiu kondukas al la kontraŭa bordo. La leporo saltis pro ĝojo. Jen favoras bona ŝanco! Li dankis ĉielen kaj teren, kaj plena de ĝojo vigle supreniris la ponton.

Ĉe la momento li sentis kapturniĝon. Kun stranga plaŭdo li falis en la akvon kaj dronis.

×

Oni diras, ke la bela agato, kiu produktiĝas sur la fundo de Non-ko estas la okuloj de la leporo.

Sankta Fontejo kaj Vundita Cervo

Ĥolonarŝan estas varmfontejo situanta en la sudo de Nord-Ŝin'an-Provinco proksima al la limo inter Orient-Ŝin'an-Provinco.

Laŭ popola kredo la varmfontoj havas miraklan forton.

Precipe mongoloj frekvente vizitas por baniĝi tie. La kutimo de banado estas interesa. Alveninte la fontejon, antaŭ ol baniĝo oni rondiras ĉirkaŭ la 44 sanktaj fontoj, kaj recitante Sanktajn Vortojn metas grenon en la fontojn. Poste ili baniĝas unue en la nomata Reinkil. Se oni banas sin 21 fojojn en tiu ĉi fonto recitante Sanktajn Vortojn, malsana parto de la korpo aŭ ruĝiĝas aŭ ekdoloras. Tiam lamao asignas al ĉiu la fonton efikan al respektiva malsano.

Oni devas baniĝi ankaŭ ĉi-tie 21 fojojn. Oni kredas, ke la 44 fontoj kune reprezentas homan korpon kaj ĉiu fonto resanigas laŭ sia pozicio malsanon ĉe la responda parto de la homa korpo. Kutime dum la bankuracado la sinbanantoj nepre devas forteni kuraciston kaj medikamenton.

Post 21 tagoj banado finiĝas. Ĉe la foriro, tute resaniĝintaj sinbanintoj postlasas siajn plu ne bezonajn ilojn... tiu, kiu estis malsana je la piedo, lambastonon, tiu, kiu havis malsanon ĉe la okuloj, okulkovrilon, ktp. Tial en la angulo de la fontejo amasiĝas monto da tiaspecaj iloj.

Tiel, la banmaniero de la fonto estas tre romantika.

Jen ni aŭskultu ankaŭ tre romantikan lagendon pri la fonto.

×

En tre malproksima tempo, la baseno de la riveroj Toral kaj Ĥalĥa estis tre bona ĉasejo por mongolaj nobeloj.

Iam en ĉaso la regnestro akiris nenion kaj estis tre malkontenta. Tiam sur malproksima monteto subite aperis granda cervo. Kuraĝigita la regnestro tuj pafis sagon kun lerta ekzerciteco. Sed la sago vundis nur la piedon al la cervo kaj ĝi forkuris. La regnestro tre domaĝis kaj ordonis la sekvanton persekuti la cervon kaj kapti.

La sekvanto postsekvis la cervon per sangmakuloj sur la tero. Li

kuris kaj kuris jen trans montoj, jen tra kampoj kaj arbaroj. Sed li fine perdis la postsignojn. Tute neatendante li trovis tie varmfonton abunde elfluantan kun vaporo.

"La cervego certe trempis la vunditan piedon en tiun ĉi fonton kaj facile forkuris", pensis li, kaj rapide revenis kaj rakontis ĉion al la regnestro.

La regnestro koleregis.

"Se la varmfonto povus resanigi la vundon de la cervego, ĝi certe resanigus ankaŭ la vian."

Kun tio la regnestro trapafis la piedon de la sekvanto kaj portigis lin al la fonto.

Post kelkaj tagoj la regnestro sendis al la vundito lian kolegon. Li estis jam tute resaniĝinta kaj revenis kun la sendito.

La regnestro miregis pri la efiko de la fonto.

"Estas Dia volo, ke la cervo gvidis nin al tiu ĉi sankta fontejo", pensis li, kaj por danki Dion li konstruis maŭzoleon sur la najbara monteto.

Trad de M. YAMAGATA

代議士歡迎會變じてエスペラント宣傳會となる

☆ハルビンにおける軍樂隊入りの豪華なる歡迎會は，時の東清鐵道總裁ホルワート將軍が仙石博士を團長とする我代議士一行のため催されたもので，中目教授と老生と2人その末席に列する光榮を得たのは，カジ・ギレイ氏の取計らいに外ならず。

☆この間の消息を知らぬ一行には時の總領事(後の外務大臣)佐藤尙武氏に對し，あの2人は何者か，何故列席させたかと抗議を申込んだのも無理からぬこと，これに對し佐藤總領事は「2人は何者であるか，又何の資格で列席したのか自分は更に關知せず，このことに就て異議あらば直接ホルワート將軍に申出られたし」と答辨されたとのこと。

☆その日の席次を一瞥すると，仙石團長を最上席の中心に，これと相對して總領事と通譯，團長の左にホルワート將軍，その次席は中目教授とゆう順序で，風來者が多數代議士の上席を占めたとゆうことは何としても常軌を逸している。

☆重なる主客數人が儀禮的挨拶を交換した後中目氏は突然起つてフランス語で挨拶した。カジ氏は，今度は私に日本語でとの注文，私はその意に任せ中目氏に續いて何かまとまりの付かぬ宣傳談を日本語でやつた。カジ氏はその後を承け，大要貴誌所載の如き趣旨にて滔々と露語の演說*をやつた。

(「協和」252號，「滿鐵とエスペラントを讀む——高橋邦太郎」から)

*「萬物の靈長と誇る人間共も相互諒解に就ては鳥獸にも恥じなければならぬ。見よ，今日の宴會席上の貴顯紳士達主客共に辛うじて通辨を介して紋切型の挨拶を交す以外には聾者，啞者の寄合さながらではないか。……一方我々エスペランチスト達は他國の同志達と直接かくの如く自由に胸襟を開いて親善を實行しつつある。私は自分のためにもエスペラントを捨てることは出來ぬ。又隣人の利益のためにも宣傳を思切る事は出來ぬ」。

(「協和」，250號「滿鐵とエスペラント——宮崎巖」から)

Mia Impreso ĉe la Tombo de Nia Pioniro

KAZI-GIREJ

TANAKA-Sadami

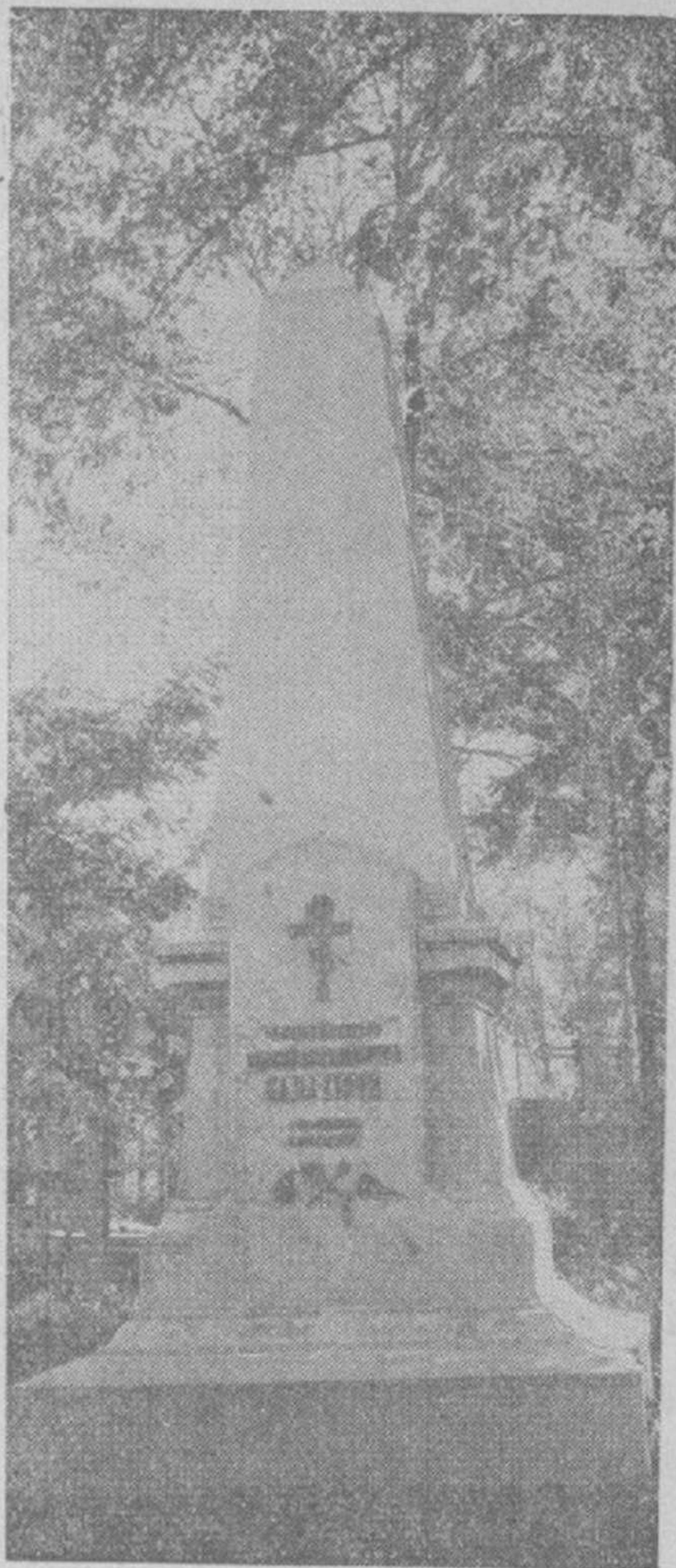
Harbino, karakteriza urbo en Nordomanĉurio, konservanta en si unikan kulturan tradicion, okupas ankaŭ en la esperantujo unikan ekzistadon en Manĉoŭkŭo. Vizitante en tiu ĉi urbo la samideanan grupon, kiu konsistas pli multe el rusoj — lastatempe aliĝis ankaŭ germana-juda kuracisto —, japanaj samlingvanoj varmigas sian koron, kaj ĝuas la verdan atmosferon dank' al la gastamaj samideanoj. La naskinto kaj kreskiginto de la grupo ja estas la mortinta pioniro Kazi-Girej. La verda semo enterigita de li kreskis kaj floris poste je la altvaloraj literaturaĵoj, kiel ekzemple, ampleksaj kulturaj revuoj nomataj „Oriento", [1] N-ro 1 kaj N-ro 2, redaktitaj de Inocent Seriŝev, [2] „Kvar Tagoj, rakonto de V. Garŝin, tradukita el rusa lingvo de Harbina Rondeto de esperantistoj sub la redakcio de Kazi-Girej", [3] kaj „Meteorologiaj Observoj faritaj en stacioj de Ĥina Orienta (Norda Manĉuria) Fervojo en Vladivostok kaj Janjczi [4] dum 1927–1928 jj kaj dum 1922–1926 jj (la unua volumo) kaj ĉiumonataj kaj jaraj resumoj (la dua volumo), eldonitaj de Meteorologia Oficejo de Administracio de Ĥina Orienta Fervojo en Harbino" per la klopodo de P. A. Pavlov, [5] kiu post la morto de Kazi-Girej fariĝis la centra ekzisto de la nuna esperanto-grupo de la urbo.

La lastaj t.e. „Meteorologiaj Observoj" estas taksataj de kelkaj personoj kiel unu el la plej altvaloraj kulturaĵoj ne preterlaseblaj en la historio de la esperanto-movado en Manĉoŭkŭo.

En iu tago de oktobro en tiu ĉi jaro mi elvagoniĝis ĉe la urbo survoje de la vojaĝo al plua nordo. Ĉar mi havis liberan tempon ĉirkaŭ unu horo ĝis la ekveturo, mi vizitis la tombon de Kazi-Girej. La tombejo troviĝas en Nangkang (南崗; Novigorod) kvartalo prokime de la rusa ĉiovendejo Ĉulin en la distanco atingebla en kelkaj minutoj piedpaŝe de la stacio. Tuj malantaŭ la tombejo sin trovas ambaŭ loĝejoj de s-ro Pavlov kaj s-ro Kio. La lasta estas malnova kaj eminenta japana samideano ĝenerale konata per iom kurioza nomo en Esperanto: „s-ro Kio kun demanda signo", ĉiama junulo kvankam senhara.

La tombejo estas en la korto de Ukraina Preĝejo, pri kiu klarigas la tabulo starigita de Harbina Turisma Asocio apud la fronta portego jene:

Ukraina Preĝejo apartenas al la grekortodoksa eklezio. Ĝia arkitekturaĵo estas de Bizanca stilo, konstruita en la jaro 1930. Ĝia parohanaro konsitas el la ukrainoj en Harbino kaj ĝi administras la malnovan rusan tombejon. (Ekzistas ankaŭ la nova rusa tombejo, kiu lokiĝas en la orienta eksterurbo ĉ 2-3 km. fore de tiu ĉi loko). En tiu ĉi tombejo estas enterigitaj la kadavroj de la sinfermintoj en Harbino en la afero de Bokseroj (拳匪) en la jaro 1900, kaj de la konstruintoj de la Oriento-Ĉina Fervojo.



La tombo de Kazi-Girej havas formon de kvarangula kolono supre iom mallarĝinta, ĉ 3-4 metrojn alta. Sur ĝia fronta flanko estas marketritaj per bronzo jenaj frazoj ruslitere sub la kruco de la grekortodoksa eklezio[6] :—

ГРАЖДАНСКІЙ ИНЖЕНЕНЪ

НИКОЛАЙ АЛЕКСЪ...

КАЗЫ-ГИРЕЙ

...ОКТ. 1866 Г

СКОНЧ. 18. ДЕК. 1917 Г.

kiu signifas en Esperanto

CIVILA INĜENIERO

NIKOLAO ALEKS...

KAZI-GIREJ

...OKT. 1866 j.

MORTIS 18. DEC. 1917 j.

Inter tiuj marketritaj literoj du partoj estas lasitaj defalite. Sub tiuj frazoj montriĝas la kruco de hakilo kaj ŝovelilo, kiuj montras lian signifoplenan rolon kiel kultura pioniro — unu el la unuaj konstruintoj de la Nordomanĉuria Fervojo. Sur la malantaŭa flanko mi legis sub la eklezia kruco jenan frazon:

МИРЪ ПРАХУ ТВОЕМУ

(PACO AL CIA RESTAĴO)

Mi rememoris la priskribon de S-ro K. Takahaŝi, pri la pompa festeno kaj efikoplenaj manifestaciaj paroladoj kaj interpretadoj prezentataj antaŭ la japanaj parlamentanoj vizitintaj tiun ĉi urbon en la jaro 1915, en kio la ĉefan rolon ludis

Kazi-Girej kun s-ro Takahaŝi k.a.[7] Ĝian signifon prave taksis s-ro Mijazaki en sia japanlingva artikolo, „Sudmanĉuria Fervoja Kompanio kaj Esperanto“[8] Kazi-Girej estis ja la vera pioniro de kulturado kaj konstruadoj en ĝenerala senco ne nur kiel la ĉefinĝeniero konstrua de Nordomanĉuriaj Fervojoj.

Estis frumateno de la aŭtuno. Malforta sunradio seka sed milda ĵetis sian ombron sur la modestan konstruaĵon en kelkaj strioj tra la branĉoj de poploj, kies folioj estis jam flaviĝintaj kaj plejparte defalintaj. Supre sur la koloraj fenestrovitroj de la preĝejo reflektiĝis la sunradio aŭ ruĝe aŭ verde sub la bulforma sed supre pinta tegmento. Kelkaj kolomboj flugadis kverante. La atmosfero estis tute kvieta, kvankam ĝi rekte frontas al Bolŝoj Prospekto (大直街) — unu el la ĉefaj stratoj en la kvartalo, sed mi ne povis forviŝi ian malgajan senton aperantan en mia koro iom tuŝita dum mi kliniĝis antaŭ la tombo, kaj ĉirkaŭpaŝis en la tombejo inter arboj. Kia malgajeco? Mi ne povas precize klarigi tion, sed kredeble tio devenis ne nur de la tiama sezono. Sed ekpensante la nunan cirkonstancojn de la nove leviĝanta Manĉoŭkŭo kaj trovante ĉirkaŭ ni multajn talentajn kaj fervorajn samideanojn unu post alia venintajn al nia lando lastatempe, mi kun iom refreŝigita forto per espero por kreskado de nia arbo semita de la pioniroj kaj kulturitaj de iliaj heredintoj, adiaŭis la tombon de la ĉefa pioniro por daŭrigi la vojaĝon kaj prilabori la konstruadon — mian donitan taskon en la nova regiono de Nordomanĉurio. (*Okt. 1939*)

Rimarko :—

1) N-ro 1 de la gazeto „*Oriento*“ estis eldonita en julio 1925. En ĝi oni skribis pri legendoj, literaturaĵoj kaj socisistemoj de Ĉinujo, Japanujo, Formoso, Koreujo, Mongolujo, Tibeto kaj aliaj aziaj landoj. Tiu monata ilustrita revuo en Esperanto estis eldonita de Esperanta Eldona Kompanio, Harbino; kosto ¥ 1.20, abonkosto por jaro ¥ 12.00. Bedaŭrinde la intenco estis interrompita jam post la eldono de la dua volumo.

2) *Inocent Seriŝev* estas fama pedagogo-pastro kiu transloĝis al Harbino el Tokio. Li nun loĝas en Sydney, Aŭstralio. Lia skribaĵo pri la impreso de Aŭstralio troviĝas en nia organo “La Revuo Orienta”, 1927, p. 242.

3) „*Kvar Tagoj*“ estis eldonita supozeble en la jaro 1915, sed ne precize.

4) *Janjczi* estas kredeble 延吉.

5) La nomon de S-ro *Pavlov* ni povas trovi en kelkaj artikoloj aperintaj en nia revuo, kiuj prezentas la impreson de la skribintoj, kiuj vizitis lin.

6) La formo de la kruco de la grekortodoksa eklezio diferencas de la ordinara kristanisma kruco konsistanta el du rektlinioj krucigitaj en rektangulo, nome la unua konsistas el unu vertikala linio k du horizontalaj linioj el kiuj situanta en supro malpli longa kaj en la mezo estas pli longa kaj malsupre ankoraŭ unu linio estas metata kline je ĉ. duonrektangulo, kiel vi vidas en la fotografaĵo, kiun mi povas prezenti al vi laŭ la favoro de S-ro Kio.

7) Vidu „Esperanto-Lernanto“, 1936, 14/IV.

8) Vidu „協和“ N-ro 250. 昭和 14 年 10 月 1 日.

LA REVUO ORIENTA

Marto 1940 Jaro XXI N-ro 3

またもハリウッドで
こんどは**パラマウント**が
エスペラントの歌を

メトロ，R.K.O. とつづけさまにハリウッド第1級の大會社が，トーキーにエスペラントをとりいれ，ハリウッドにエスペラント時代來るの感をいだかせたが，今度はパラマウントが，大作「シンガポールへの道」にエスペラントの歌をとりいれることになり，ドロシイ・ラムーアほか男女俳優100人に歌わせることにした。

この映畫は，ビング・クロスビィ，ドロシィ・ラムーア主演で，エスペラントの歌は，シンガポールへの途中迷いこんだ熱帶の孤島で行われる祝宴と踊りとにつれて歌われるもので例のジョセフ・シェーラー氏が原作することになつている。

會社首腦部，特にこの映畫にエスペラントを取入れることに贊成した撮影所長ハーラン・トムプソン氏へ激勵の辭を送ることが希望されている。

宛名は，S-ro Direktoro Harlan Thompson, Paramount Studio, Hollywood, Calif., U.S.A. である。

北アメリカむけエスペラント放送
EIAR の英斷

EIAR（イタリア放送協會）が，かねて毎週月曜日と土曜日にエスペラントで放送し，また毎月エスペラント版プログラムを發行していることは，そのたびに報導したとうりであるが，今年の1月からは，英語の大陸北アメリカへむかつてもエスペラント放送を行うことになつた。これは，從來のエスペラントの放送は，おもに，ヨーロッパ諸國をめざしたもので，アメリカの聽取者にとつて時間的に不便であつたため，特別にアメリカむきの放送が熱心に希望されていたのが實現されたものである。放送は毎週火曜日で，イタリア時間午前2時とゆう厄介な時間であるが，エスペラントの普及狀態に認識深い當局が萬難を排して實現したもので，希望者が多ければ，南アメリカ大陸むき放送も實現させる用意があるといつている。

新案内記 «TORINO»

北イタリアのポー河に沿つた，史蹟と美術館の町，そして，ファシズム・イタリアの新興工業都市のトリノが昨年末，エスペラント文の觀光案内を出した。グラビュア版の美しいもので，彫刻，建築，風景等の寫眞がたくさんはいつている。

配布を受けたい人は，つぎのところへもうしこめばよい。

Ente Provinciale per il Turismo Torino, Via Roma 18, Torino, Italio.

"Batalo de l' Vivo" 再版

イギリスのエスペラント出版會社から出された Zamenhof 譯の Dickens: "Batalo de l' Vivo" は，數年前品切になつたまま，再版されず，おしまれていたが，Nova Romanserio の1册として，再び出されることになつた。

Nova Romanserio は，近く，プラクティーコ社から出される豫約本であるが，このセリーオとしては，このほか，おなじく長らく絶版になつていた，Kabe 譯のシェンキェウィッチの「塔臺守」をはじめ，6册の小說の譯が出されることになつている。

Ne Prokrastu! vian aliĝon al la XXVIII-a !!

☆家族同伴歡迎！

すでに新京住吉氏夫妻をはじめ，家族同伴の申込も2,3ありますが，なお續々皇紀2600年の春を聖地日向へ，新婚，舊婚旅行をかねて，家族同伴御來會を希望します。

——Kotizo rabatota!——

☆分科會申込を早く！

今日まで分科會の申込は唯ひとつです。遅くも3月いつぱいに申込を願わなければ，會場が不足します。

☆協議會の提案を早めに！

4月以後の協議提案は原則として受付けないことにします。なお提案說明原稿もなるべく早目に提出願います。

☆委任狀を忘れぬよう

各地方代表は委任狀お忘れなきよう，各地方少くとも1名の參加者は願いたいとおもいます。

☆葉書1枚フンパツして，何によらず，連絡を願います。以て不慣れの準備委員を助けてください。

☆宿舍の申込

合宿は，すでに當地旅館と交渉ずみですが，特別に一室獨居を希望の方は，その旨，早めにお申込み願います（宿賃にも御希望あれば，その旨を！）

ポスター作成

近くAfiŝoを發行して各地方會あて發送したいと存じます。その折には特別御配慮を願います。

☆不在參加歡迎

遠隔の地や當日都合のわるいかたも奮つて參加申込みください。すでに，それらの方に進呈すべき參加章は神木佐野杉を以て謹製中で，その他，大會記念品を差しあげます。

第28回日本エスペラント大會
準備委員會
宮崎市南廣島通三杉田醫院內
振替鹿兒島 8802 番

ハンガリア赤十字社
エスペラントを公用

ハンガリアの陸軍省は，ハンガリア・エスペラント聯盟の照會に對して，同聯盟のエスペラント奉仕をよろこんで利用するむね答え，ハンガリア赤十字社に對し，同聯盟との交渉にエスペラントを用いることを依囑した。

ハンガリア赤十字社は同聯盟に對し，同社がエスペラントを公用語とし，外國からのエスペラント文の手紙に對しては，すべてエスペラントで答えるむねを知らせた。

ブラジルの活況

ヨーロッパ大陸でエスペラント運動が，戰爭の重くるしい雰圍氣のもとに，やゝ生彩をかいている感のあるとき，南米ブラジルでは，ますます活潑になりつつある。

昨年11月21日，第1回唯神主義者記者作家大會では，Ismael Gomes Braga 氏を招いて，エスペラントについて，3時間にわたり，熱心に聞いた。

また，ちようど同じ日，"Plena Vortaro Esperanto-Portugala" が發行されたが，このことは，ブラジルのエスペラント運動にとつて，25年振りのことであつた。

Sam Jansson 氏

Sveda Esp.-Federacio 副會長で，尨大な Sveda-Esp. Vortaro の共著者 Sam Jansson 氏が昨年9月29日，心臟病で亡くなつた。滿63歲であつた。

Jansson 氏は，なだかい中學校 Bekowska Skolan の校長で，1933年御來朝の Princo Carl もこの人の教えを受け，エスペラントも學ばれた。Jansson 氏は1922年から30年まで Sveda Esperanto-Instituto の會長で，これの檢定試驗に合格したものは，2000人に達している。

各地報道

原稿は 20 字詰に！
締切は毎月末日嚴守

東　　京

〔婦人聯盟東京グルーポ〕　☆1月例會＝15日井田夫人宅にて新年會を開催，出席者，萬澤，井田，矢次，川原，柏原，井伏外にお客様として，學會の三宅氏及び松本夫人，石，藤井兩嬢が御参加，晩餐を共にした後，總會において決定されなかつた聯盟の今年度の事業について協議され，三宅氏から御懇切な助言を頂き，今年度は時局柄主として，お互のエス語技術を高める事に主力を注ぐ事になりました。

なお朝鮮から御留學の石宙善さんから，又大連から御上京の藤井元子さんから，色々あちらの生活等興味あるお話や，石さんのお上手な朝鮮語の「アリラン」のお歌を伺つたり一夕を樂しく過しました。

☆哲學講座＝東京グルーポは會員一同の言語技術を高めると同時に一般的教養の向上をも計るため昨年4月より教養講座を開設し，昨年中に科學講座（講師江上不二夫氏）と心理學講座（講師宮城音彌氏）とを催しました。今年最初の講座は哲學と決定し，1月 22 日より開講。毎週月曜午後7時より9時まで，新宿ノーヴ3階（帝都座裏）において。講師は文部省普通學務局の地主千畝氏，テキスト波多野精一著「哲學史要」。皆様の御参加歡迎。但し婦人に限ります。（*S. Ibuŝi*）

札　　幌

〔北海道エスペラント聯盟〕　エスペラント展覽會材料蒐集を先號に發表したところ早速案内記等を御寄贈下さつた方があつた事感謝に耐えない。寫眞ポスター小玩具御持合せの方は是非御寄贈下さい。材料の集り次第展覽會を開催する積りです。方法として成るべく地方の小學校など巡廻させるつもりです。1月 16 日稚内より上海に行かれる佐々木孝一郎君が來札され明菓にて茶話會，久し振りでエス語交換によつて Verda atmosfero に浸つた。大會プロトコーロは1月中旬發行の見込。（HEL 本部報）

永見正夫君死去――HEL と札エスの熱心な Membro であつた札幌商業生永見正夫君が 12 月 17 日心臓脚氣のために昇天された。同君は昭和 11 年來の熱心な同志で學業の傍世界平和と文化の向上を目標としてエス語を研究し，昨年は同志と共に札商に於てエス語展覽會や講習會等を開き同校内にエスグルーポを創立したりして，最もその將來を囑目されまた僕等も同君を力として居たのであるが惜しいかな昨秋より病魔の犯すところとなり卒業と，校内グルーポの飛躍を前にして世を去られた事は，かえすがえすも殘念な事である。我等ここに謹んで永見君の靈魂の冥福を祈る。（相澤報）

小　　樽

〔小樽佛教エス會，小樽エス協會〕　12 月 17 日夜玉乃屋に於てエス協會佛教エス會合同のザメンホフ祭を催す。出席者は脇坂，藤川，江口，伏見，高橋，福田，村田の7名，數は少いが同じいぶきにつながるよき人々です。

ザメンホフを想う，それぞれの話題に賑つた後，さる新聞社の撮影技師（？）より借りてきたとゆう福田氏持參のイカメシイ Kamero と bela な Kelnerino の前によそゆきの顏貌をならべる。

〔北海道エス大會準備委員會〕　さて開き直つて紀元 2600 年を小樽の地に迎えるべき第8回北海道エス大會の準備委員會が續いて結成され，仕事の分擔大體の方針とさしあたつての事業などが談合された。

小樽のザメンホフ祭　向つて左から：福田，高橋，脇坂，藤川，江口，伏見，村田の諸氏



1 月 26 日に藤川氏宅で今年最初の準備委員會を開く。未だ北燕の地とゆうに近いこの地の大會への暖かい御同情を全國の諸兄姉に俟つや切。

尙準備委員會事務所は下記の通り決定。

小樽市花園町西四ノ五，西角方　村田氣付。

福　岡

〔學會福岡支部〕 ザメンホフ祭——12 月 15日 18 時より東中洲生田菓舗階上にて開催。參會者 7 名。晩餐後幹事より本年度事業報告あり，第 28 回宮崎大會其他につき懇談した。

☆月例會——1 月 15 日 19 時より九大惠愛會館にて開催。參會者 8 名。S-ro Sueur の出席を得て新年にふさはしい愉快な一夕を過した。

☆1 月 4 日岸和田の同志中西義雄氏が來福されたので，野見山幹事は同氏を宿舍に訪問歡談した。

大　連

〔大連エス會〕 12 月 15 日 19 時，滿鐵厚生會館に於て，最近來連の關東衞生試驗所成田常次郎歡迎會を兼ねてザ祭を行う。甘井子より滿石，滿化の川關，高木兩氏の新顏，及び瓦房店より由比氏の參加を得たるは大なる喜びであつた。

合唱 La Espero　司會	石崎分一
開會の辭，歡迎の辭	宗　禹憲
大連へ參りまして	成田常次郎
大連初期のエス運動思い出	中溝　新一
最近 5-6 年の當地エス動靜	宗　禹憲
エス語學習の有益なる話	川上　虎男
新潟地方エス運動の思い出	久保　義郎
私のエス語經歷	川關　等基
ザ祭に初めて出席して	高木　隆雄
奉天ザ祭(昨夜)の報告と感想	由比忠之進

終つて由比氏の發起にて宮崎大會を出來る丈有意義にする爲，一同席上にて大會不出席參加費として 1 圓宛據金をなす。22 時 10 分散會す。

(聖德街4丁目 59　シズカ醫院內　大連エス會)

大　阪

〔大阪エス會〕 火曜日例會——1 月 9 日第 1 回新年座談會。全部 esperante，每火曜日中等講習と例會を併行。1 月 28 日(日)特別會を心齋橋筋の Dombal に開く。入營中の松田君都合で缺席。滿洲よりの松本氏出席。OES 文庫の件，滿洲事情を論ず。

講習會——1 月 30 日 3 ヶ月の中等講習終る。進藤，貫名兩氏の併行講習。主として，demando-responda metodo (?) でかなり成功。Kursanoj 同士も esperante paroletas. 火曜日每に 30 分づつ續行練習の豫定。(參加隨意)。

豫定——OES 文庫の發行にかなり力をかけているので，かえつて刺戟となつて研究的な例會になつて來た。5 分間演說も續行。3 月中に「エスペラント」讀者の會を開くはず。konsiloj をどしどし委員會あてにください。(例會係報)

(信濃橋交叉點日清ビル內ワセダクラブ氣付
大阪エスペラント會)

南　洋

〔學會支部〕 Bonvolu permesi min prezenti al vi iom pri Esperanto-movado en nia insulo. En la jaro 1933 ni havis Esp.-rondeton. Ankaŭ s-roj Nakajama kaj Higasi estis en la rondeto. Post kiam ili foriris 1936, neniu gvidanto estis en tiu ĉi insulo. Sed antaŭ kelkaj jaroj s-roj Oomura kaj S. Kato komencis lerni nian karan lingvon, kaj dank' al iliaj klopodoj ni povis gajni entute 17 samideanojn, kiuj tuj fariĝis membro de JEI, kaj estis permesitaj de la instituto fondi ĝian filion en Angaur. Sed tamen bedaŭrinde ni ĉiuj estas ankoraŭ komencantoj kaj ne povas diri ke la filio estas perfekta. Por fariĝi bonaj esperantistoj mi deziras multe lerni per korespondado. (M. Ŝibajama)

Deziras korespondi s-ino Ĉijoko Kojama (小山千代子), s-roj E. Kojama (小山衞壽), E. Joŝioka (吉岡悅善), H. Ajukaŭa (鮎川英雄), S. Jasui (安井茂) kaj M. Oota (大田實), ĉiuj sur la insulo Angaur, Mikronezio (南洋アンガウル島).

〔公　告〕

財團法人日本エスペラント學會報告

・昭和14年度・

役員會報告： 昭和14年1月22日理事會開催, 1. 理事長選擧(大石和三郎當選), 2. 常務理事選任 (井上萬壽藏, 川原次吉郎, 大井學, 美野田琢磨, 三石五六, 以上5名就任), 3. 昭和14年度評議員選任, 4. 昭和3年度事業報告, 5. 昭和13年度決算並に本會財產目錄に關する報告, 6. 昭和14年度經費の收支豫算審議決定, 7. 黑板, 柳田, 井上, 小坂の4氏を顧問に依囑, 8. 職制並に服務規定制定, 9. エスペラント學力檢定試驗規約制定, 10. 日本文化宣揚部設置, 11. 役員の各部分擔決定, 12. 本年度に於ける運動及事業方針に關する一般協議打合せ。

昭和14年1月29日評議員會開催, 1. 理事長及常務理事決定に關する報告, 2. 昭和13年度事業報告, 3. 同決算報告, 4. 昭和14年度經費の收支豫算承認, 5. 黑板, 柳田, 井上, 小坂4氏を顧問に依囑の報告, 6. 職制及主事決定の報告, 7. エスペラント學力檢定試驗規約決定報告, 8. 日本文化宣揚部新設に關する內規變更の件, 9. 役員部署決定の件, 10. 其他一般會務の打合せ。

事業報告： 1. 月刊雜誌 La Revuo Orienta を刊行し之を維持員に配付せり。本誌は維持員に對する教育機關の一にして大正9年以來1回の休刊もなく發行す。

2. 講習會並に研究會開催――初等, 中等講習會各4回, 高等講習會2回開催せり。別に每週1回研究例會を開催せり。

3. 圖書の出版――本會出版部は右年度內に次のエスペラント圖書を刊行せり。

☆日本書紀第5編。猶從來發行の圖書の重版を發行せり。

4. 海外圖書の取次――各種のエスペラント圖書の輸入をなし斯語學習者の便宜を圖ると共に本學會發行のエスペラント圖書を輸出し我國文化の世界的發揚に資せんとせり。

5. 學力檢定制度の施行――本年度制定のエスペラント學力檢定規約により普通試驗3回(5ヶ所), 高等試驗1回施行せり。

財產目錄及昭和14年度收支決算並に昭和15年度豫算別表の通り。(次頁にあり)。

昭和15年最初の役員會

今年度最初の役員會は, 1月28日, 理事會と評議員會と合併で開かれた。會議事項は, 1. 昭和14年度事業報告, 2. 昭和14年度會計報告, 3. 昭和15年度豫算の審議決定, 4. 龜崎孃「エスペラント獎學賞」の運用方針についてであつたが, 1, 2, 3 の諸項については, このペイジおよびつぎのペイジに公告のとうりであり, 第4項については, 龜崎孃「エスペラント獎學賞」は, その基金の每年度利息をもつてあてることとし, これが具體的な運用は主事に一任することになつた。

ことしの役員

現在の理事, 監事 (任期2ヶ年, 14年度改選)評議員(任期1年)は下記のとうりである。

理事長　大石和三郎 (高層氣象臺長)

理　事 (ABC順)　淺田一(醫學博士), 藤澤親雄(大東文化學院教授), 井上萬壽藏*(鐵道省養成課長), 川原次吉郎* (中央大學教授), 三石五六*, 美野田琢磨*, 望月周三郎(慶應大學教授, 醫學博士), 西成甫(東京帝大教授, 醫學博士), 大井學*, 佐々城佑, 鈴木政夫(千葉醫大教授, 醫學博士), 土岐善麿(東京朝日新聞論說委員), 上野孝男 (*印常務理事)

監　事　丸山丈作(東京府立第六高女校長), 清水勝雄

評議員　安黑才一郎, 馬場清彥, 福富義雄(日本醫大病院藥局長), 保坂成之, 石黑修, 岩下順太郎, 小林東二, 小松文夫, 久保貞次郎, 萬澤まき子, 宮城幸子, 酒井鼎, 德田六郎, 浦良治(東京帝大助教授, 醫學博士), 山崎弘幾

顧　問　穗積重遠(東京帝大教授, 法學博士, 男爵), 井上仁吉(前東北帝大總長), 黑板勝美(東京帝大名譽教授, 文學博士), 一島章道(子爵), 小坂狷二, 柳田國男。

〔公　告〕

財團法人日本エスペラント學會

會　計　報　告

（昭和十四年十二月末日）1939

〔A〕 財産目錄

※資産ノ部※

現金預ケ金	21,954.36
三井信託預金（大石）	13,344.75
安田貯蓄据置預金（大石）	3,670.45
同　當座預金（大石）	1,726.95
勸業債券	495.20
支那事變公債	1,274.00
振替貯金保證金	20.00
東京振替口座（11325）	1,092.69
同　上（32089）	192.79
現金在庫金	137.53
在庫圖書物品評價額	15,577.54
學會出版圖書其他	12,754.65
取次和洋書	2,822.89
土地建物	16,126.95
土地（80坪3合5勺）	9,750.00
建物（雜作付延坪60坪7合5勺）	6,376.95
以上合計	53,658.85

※負債ノ部※

次年度分前納維持員會費	1,487.81
普通維持員會費	321.11
正　維持員會費	876.20
賛助維持員會費	213.00
特別維持員會費	77.50
諸預り金	789.60
以上合計	2,277.41
差引正味資産	51,381.44

〔B〕 現金預ケ金內譯

永代基金	14,619.86
前年度末現在	14,121.49
本年度預金利子	498.37
本年度寄附金	0
常用基金	300.00

4,300.00 ノトコロ昭和7年事務所建築費＝全額利用，ウチ 300.00 ヲ一般經費カラ回收

次年度會費及諸預り金	2,277.41
龜崎奬學基金	1,000.00
日本文化宣揚部資金	368.16
諸積立及資金	3,688.93
出版，取次部資金	1,247.77
特別積立金	341.16
特別出版資金	1,500.00
經費豫備金	300.00
以上合計	21,954.36

〔C〕 本年度收支經費明細

※收入ノ部※

維持員會費總額	3,132.62
普通維持員會費	1,132.66
正　維持員會費	1,682.46
賛助維持員會費	235.20
特別維持員會費	82.30
エス誌賣上總額	936.64
大取次賣上	782.13
分冊，殘本整理	154.51
圖書賣上總額	4,039.78
本會出版物	2,183.67
取次和洋書	1,856.11
講習會費收入	303.00
學力檢定料	424.00
雜收入（利子其他）	324.72
以上合計	9,160.76

※支出ノ部※

雜誌印刷費	3,042.27
同　發送費	114.61
本會出版部支出	940.18
取次和洋書仕入費	865.67
I.E.L. 賦課金	60.00
地方會補助	15.80
維持員總會費	60.00

宣傳費	119.70
通信費	332.68
諸印刷費	116.55
消耗品費	232.39
備品及修理費	110.00
人件費(給料，手當)	1,453.00
事務所維持費	376.89
税　金	145.80
電話費	74.16
火災保險料	114.72
文庫費	27.28
諸謝禮費	124.00
雜　費	70.36
臨時費	85.00
出版取次部資金へ繰入	379.70
常用基金へ繰入	300.00
以上合計	9,160.76

〔D〕 資産ニ計上セザル什器備品

電　話	1
本會文庫書籍部數	2850
事務用テーブル類	11
同上　廻轉椅子	6
應接用テーブル	2
同上　椅子	3
布張椅子	12
講習用長机	14
同上　木臺椅子	30
集會用籐椅子	36
額　類	7
各種書類箱及本箱	22
石炭ストーブ(大小)	2
時　計	2
謄寫版器	2
秤(大小)	3
安全書庫	1
タイプライター	1
宛名印刷器	1
輪轉謄寫機	1
煉炭ストーブ	1

奬學基金 1,000 圓寄附により龜崎佳子孃は終身維持員となられた。

昭和十五年度收支豫算

※收入ノ部※

維持員會費總額	3,371.00円×0.9	3,033.90
普通維持員	410人×2.4円	984.00
正　維持員	654人×3.0	1,962.00
賛助維持員	65人×5.0	325.00
特別維持員	10人×10.0	100.00
終身維持員	19人	
エス誌賣上總額		572.00
大取次賣上	250部×.144円×12月	432.00
分册殘本整理		140.00
圖書賣上總額		3,000.00
本會出版物		2,000.00
取次和洋書		1,000.00
講習會收入		270.00
學力檢定料		100.00
雜收入		150.00
豫備金繰入		169.10
合　計		7,295.00

※支出ノ部※

雜誌印刷費	2,250.00
同　發送費	100.00
本會出版部支出	900.00
取次和洋書仕入費	500.00
IEL 賦課金	60.00
地方會補助費	15.00
維持員總會費	60.00
宣傳費	150.00
通信費	200.00
諸印刷費	100.00
消耗品費	250.00
備品修理費	100.00
人件費(給料，手當)	1,450.00
事務所維持費	400.00
税　金	150.00
電話費	80.00
保險料	100.00
文庫費	30.00
謝禮費(講習會其他)	120.00
雜　費	80.00
臨時費	200.00
合　計	7,295.00

本號だより

この3月は，UEA の創立者として，エスペラント運動の歴史に輝く Hodler の 20 年忌にあたりますので，その方面のことにくわしい進藤さんにお願いして，この人について書いていただきました。

「リングヴイ・レスポンドイ」欄を設けましたが，これは，語學雜誌の，いわゆる「質疑應答」欄が，とかく，雜誌のすみにおいこまれているようなありさまであるのに反しおうくのペイジを，これにさいたばかりでなく，その質問の內容によつて，いろいろな人に答えていただくことにしたところに「みそ」があります。この號には，かかげた 3 篇のほか，岡本さんと川崎さんとへもお願いしてありましたが，おいそがしいため，まにあいませんでした。どうかむつかしい（しかし，一般性のある）問題を出してください。

「滿洲國特輯」として，山縣さんのまことに美しい物語と田中さんの心にふれる印象との2篇をえたことは，うれしいことでありました。

静岡市の大火に際しては，「個人消息」欄に書いた富永氏のほかには，會員には，被害者がありませんでした。

(M-Ŝ)

個人消息

江上不二夫氏（學會前評議員）は，昨年 12 月 29 日會員米田由紀孃と結婚された。

富松正雄氏（長崎）は上海（三菱江南造船所）へ轉任された。

山鹿泰治氏（東京の veterano）臺灣へ移り高雄稅關にはいられた。

倉地治夫氏（東京）は 1 月 7 日アメリカから歸朝された

富永齋氏（静岡市紺屋町 46）静岡の大火に御經營の病院全燒，しかし，幸い，御家族にも病院にも負傷者はなかつた。

柴山慶氏（京都）臨濟學院（元臨濟宗大學）學部教授に就任された。

堀眞道氏（札幌・元學會監事）1 月 10 日から 4 月中旬まで司法研究所第三部研究員として東京に滯在される。

大山聖華氏（京城）1 月 17 日新京を訪問，同地の會員から歡迎を受けられた。

松本健一氏（滿洲國）眼の治療のため歸國，大阪に滯在中。

〔一月中學會訪問者〕 隅田益子孃（大阪），村上壽一氏（滋賀），宮田健治氏（新潟縣），佐々木孝一郎氏（上海），藤本五郎氏（朝鮮），比留間恭平氏（栃木），竹內藤吉氏（石川）。

新賛助會員

したの諸氏は，あたらしく賛助會員になつてくださつた感謝にたえない。（12 月 1 日から 1 月 31 日まで）。

山縣光枝女史（新京），谷垣琢磨氏（大阪），中村靜人氏（中國），矢次とよ子夫人（東京），金子美雄氏（東京），小林胖氏（東京），笹原茂三郎氏（東京），鈴木辰夫氏（東京），後藤靜香氏（東京），吉田榮氏（函館），森原奎二氏（大連），小池常作氏（新京），菅原進氏（戰地），横田正之氏（大阪），高木隆雄氏（大連），小西紀生氏（名古屋）

☆**新特別會員** 由比忠之進氏（滿洲國）と藤間常次郎氏（大阪）とは特別會員になつてくださつた。

財團法人 日本エスペラント學會

會費

正會員	（年額）	3 圓
賛助會員	（同）	5 圓
特別會員	（同）	10 圓
終身會員	（一時金）	100 圓

毎月一回一日發行 エスペラント 第八年 第三號
昭和十五年二月十日 印刷納本
昭和十五年三月一日 發行
編輯兼發行人 大井學
印刷人 竹田佐藏 東京市神田區三崎町二ノ四
印刷所 一匡印刷所 東京市神田區三崎町二ノ四
定價一部20錢・送料5厘
［會員以外の年極購讀はとりあつかいません。］
發行所 財團法人 日本エスペラント學會 振替東京11325
東京市本郷區元町1丁目13番地4 電話小石川5415

注意

一受領票は振替貯金拂込の證據となるものに付大切に保管せられたし

一拂込金の不着又は其他の事故に依り問合せらるゝ場合は必ず左の事項を記入せられたし

拂込月日、拂込郵便局名、口座番號、加入者氏名、金額

一振替貯金の拂込を請求せらるゝ場合は左の割合に依る料金を郵便切手を以て納付せられたし但し「拂込料金加入者負擔」と表示しある専用拂込書用紙使用の場合に限り加入者の貯金より徴收します

壹圓迄	貳錢	百圓迄	拾錢
五圓迄	四錢	五百圓迄	拾五錢
拾圓迄	六錢	千圓迄	貳拾錢
五拾圓迄	八錢	壹千圓を超ゆるときは其の超過額壹千圓迄毎に五錢を加徴す	

通信文記載欄

☆第28回日本エスペラント大會☆

參加申込書

1. 氏名(フリガナツキ)........................

2. 職業(或イハ學校名)........................

3. 住所........................

4. 滯在豫定　　日間

5. 宿舍申込　有・無

6. 前夜懇親晩餐會
出席・不出席

7. 第2日觀光　參加・不參加〔第　　班〕

8. 所屬エス會........................JEI 會員(會員外ノ方ハ消スコト)

A.	參加費	1圓00錢
B.	前夜晩餐會費	80錢
C.	晝餐會費	50錢
Ĉ.	記念寫眞代	50錢
D.	觀光費	3圓00錢
E.	懇親晩餐會費	1圓50錢
F.	寄附金	圓　錢
	計	圓　錢

御住所氏名は特にはつきりとよみやすくお書下さい

文字は正確明瞭に一、二、三、十の數字は壹、貳、參、拾とお書き下さい

拂込通知票

口座番號	加入者氏名	※	拂込人住所氏名
鹿兒島八八〇二番	第二十八回日本エスペラント大會準備委員會 宮崎市南廣島通三杉田醫院内	一金	※
受付局日附印			口座所管廳日附印

振替第九號甲

金額以外の記載事項を訂正した場合は相當證印して下さい

金額を訂正したものは受付を致しません

一年保存

拂込票

口座番號	加入者氏名	※	拂込人住所氏名
鹿兒島八八〇二番	第二十八回日本エスペラント大會準備委員會 宮崎市南廣島通三杉田醫院内	一金	※
口座所管廳日附印			受付局日附印

各票記載事項に間違のないことをお確め下さい

局番號印

※印の欄は拂込人に於て記入して下さい

LA REVUO ORIENTO
Monate eldonata de
JAPANA ESPERANTO INSTITUTO
Japanujo, TOKIO, Hongo-Motomati
Jarkotizo: 4 jen (inkl. sendokoston)

昭和十五年三月一日發行（毎月一回一日發行）